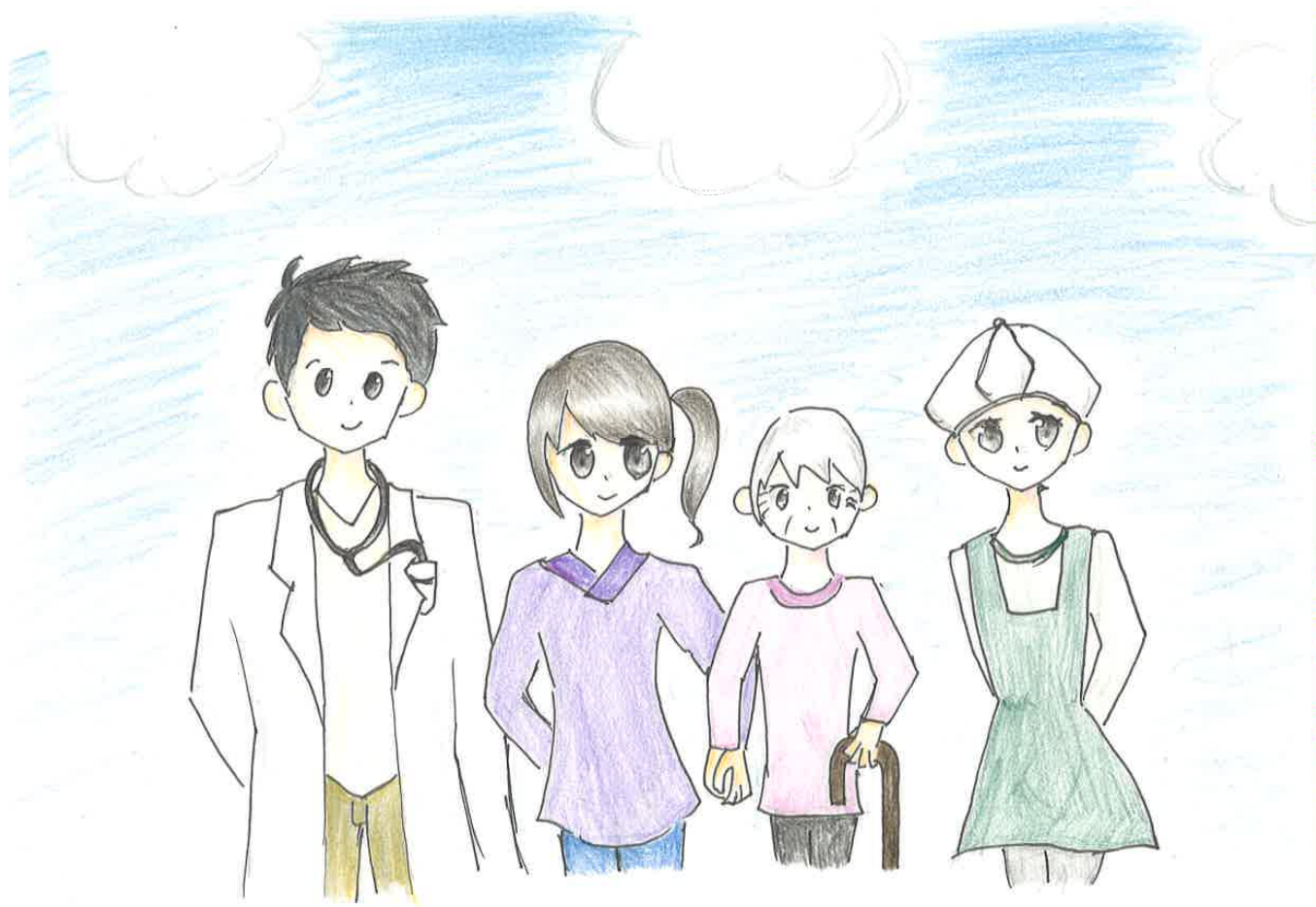


明日に生きる

—作文コンクール入選作品集—

第27号



平成28年度

東京都産業教育振興会

表紙デザイン

この絵は、中心におばあちゃん、隣に介護ボランティアの方がいます。
そして、おばあちゃんを支えるためにお医者さんや栄養士さんがいます。
人を支えるのに沢山の職業があるということを表してみました。

立川市立立川第七中学校
2年 遠藤 双葉

明日に生きる

第二十七号

— 作文コンクール入選作品集 —

明日に生きる 第二十七号 ― 作文コンクール入選作品集 ― 目次

講 評

作文選考を通して

中学校の部

選考委員長（立川市立立川第七中学校長）

大神田 佳明 1

選考をとおして

高等学校・専修学校の部

選考委員長（東京都立鷺宮高等学校長）

石坂 敦子 2

表彰式の記念写真

中学校の部

ページ

最優秀賞	製品としての価値を考える	大田区立大森第一中学校	二年	大家 明日菜	5
優秀賞	私と家族をつないでくれる手作りエプロン	大田区立大森第一中学校	二年	燕昇司 美莉	7
優秀賞	学ぶことの喜び	北区立明桜中学校	三年	鈴木 那奈	8
佳作	技術科の意義	新宿区立西早稲田中学校	三年	真田 礼佳	10
佳作	職場体験で学んだこと	墨田区立吾嬬立花中学校	三年	石 森 真梨子	12
佳作	職場体験で得たもの	墨田区立吾嬬立花中学校	三年	中 崎 美 希	14
佳作	やりがいを感じて働くこと	墨田区立本所中学校	二年	金 内 佳 乃	15
佳作	職場体験	墨田区立本所中学校	二年	横 山 華 子	17
佳作	レモネード	大田区立大森第六中学校	二年	渡 辺 凜 葉	18
佳作	つくることの喜び	世田谷区立烏山中学校	三年	佐 藤 杏 香	19
佳作	働くこと	世田谷区立烏山中学校	二年	廣 末 真 寧	21
佳作	働くことの喜び	世田谷区立烏山中学校	三年	和 田 奈々穂	22
佳作	技術のラジオ作りで学んだこと	北区立滝野川紅葉中学校	三年	古 川 陽 介	24
佳作	体験から自分の進路へ	足立区立江南中学校	二年	内 田 杏 菜	25

高等学校の部

ページ

佳作	私の夢	東村山市立東村山第四中学校	三年	寒河りまな	27
佳作	好きこそ物の上手なれ	東村山市立東村山第四中学校	三年	関口遼祐	28
佳作	私の将来の夢	東村山市立東村山第四中学校	三年	細淵さくら	30
佳作	目に見えない仕事と感謝の気持ち	東京都立大泉高等学校附属中学校	二年	田辺凜	31
最優秀賞	遠回りした道の先	東京都立墨田工業高等学校	三年	桂栄光	33
優秀賞	私の転換点	東京都立田無工業高等学校	三年	松永拓也	35
優秀賞	拡がれ「福祉の心」	東京都立野津田高等学校	二年	藤野実咲	36
優秀賞	『御馳走様』を『頂きます』	東京都立瑞穂農芸高等学校	二年	尾嶋亜水	38
佳作	将来の夢	愛国高等学校	二年	浅見汐里	40
佳作	調理師になるために	愛国高等学校	三年	遠藤祐香	42
佳作	学んできたこと	愛国高等学校	三年	菅野紗矢	44
佳作	将来の夢	愛国高等学校	三年	高山 アミイ 由璃奈	45
佳作	憧れの存在	愛国高等学校	三年	中野希都	47
佳作	戴帽式を終え実習へ	愛国高等学校	三年	嶺島千明	84
佳作	インターシップが私に教えた養殖の面白さ	東京都立大島海洋国際高等学校	三年	藤田能徳	50
佳作	学校での勉強とアルバイト	東京都立小金井工業高等学校	二年	橋本昂季	52
佳作	食の洋風化と日本食離れ	東京都立農芸高等学校	三年	佐藤美朝	53
佳作	私達がやらなければならないこと	東京都立農産高等学校	一年	佐藤綾乃	55
佳作	対人援助職のプロになる	東京都立野津田高等学校	二年	小川紗奈	57
佳作	「ありがとう」のありがたさ	東京都立野津田高等学校	二年	丹野利玖	58

専修学校の部

佳作 介護職として社会を創る

東京都立野津田高等学校

二年 福島香穂

60

優秀賞 私の職業観

青山製図専門学校

一年 門馬英人

61

佳作 働くことの喜び

東京エイトラベル・ホテル専門学校

二年 高橋瑛乃

63

佳作 私の将来の「夢」

マリールイズ美容専門学校

一年 小松美樹

64

応募校等一覧表

作文コンクール選考委員名簿

あとがき

66

67

68

作文選考を通して

中学校の部 選考委員長

大神田 佳 明



今年度は、三十二校から百十九編の応募がありました。選考委員会では一次審査、二次審査を経て十八編を入選として、最優秀賞一編、優秀賞二編を選考いたしました。昨年と比べて応募作文が多く、テーマが多様で内容も充実していた。

ました。特に二次選考に選ばれた十八作品は、内容や伝え方が工夫された読み応えのある優れた作文が多く、応募いただいた生徒の皆さんの思いが伝わってきました。また、今年度は技術・家庭科の授業から得た体験を踏まえ、ものづくりの大切さや喜び、日本の伝統文化の素晴らしさなどを素直な心で捉え、そこから自己を見つめ将来に対する考え方を表現している作品が審査員の心を惹き付けました。さらに、職場体験、ボランティア活動等で得られた人との関わりから学び取った貴重な体験を通して、人生観や職業観、自己の将来の生き方や目標につながった魅力ある作品が多く見られました。

今回、最優秀賞を受賞した大家明日菜さんの「製品としての価値を考える」は、小学校の図工の時間に友達から「使

にくそうだね」と言われたことがきっかけでものづくりに対する意識が変わり、技術・家庭科の授業を通して、改良することでの製品としての価値が上がることに気付きました。さらに、製作者と消費者の立場で考えることの大切さや、製品を選択する主體的な意欲や態度が表現されていました。また、優秀賞の燕尾司美莉さんの「私と家族をつないでくれる手作りエプロン」は、家庭分野の時間に製作したエプロンを着用して、家族のために家事を手伝ったことが家族の笑顔と幸せにつながりました。ものづくりの体験を通して、相手の立場で考えることの大切さや素晴らしさを実感し、社会貢献の意欲が育まれたことが伝わってきました。もう一人の優秀賞、鈴木那奈さんの「学ぶことの喜び」は、浴衣づくりを通して日本の伝統である裁縫の技術に触れるとともに、和服の着心地や繊細な心遣いなど和の心の大切さを学ぶことができました。さらに、浴衣が完成したときの満足感や達成感は、自分の成長や将来の目標につながる貴重な体験であったことが表現されていました。

これからの社会は情報化やグローバル化が急激に進み、生産人口が減少するとともに、多くの生徒たちは、今は存在していない新しい職業に就くと予想されています。今後、技術・家庭科の学習や勤労に関わる体験学習を通して、社会的、職業的に自立し、未来を切り拓いていける資質や能力を育んでほしいと願っています。

最後に、作文コンクールに応募していただいた多くの生徒の皆さんありがとうございました。また、ご指導いただいた各学校の先生方をはじめ、貴重な体験をさせていただいた地域や事業所の皆様、温かくご支援くださいました保護者の皆様に心より感謝を申し上げます。

選考をとおして

高等学校・専修学校の部 選考委員長

石坂 敦子



今年度は、高等学校の部で百九編、専修学校の部で一九編の応募がありました。選考委員会で慎重に審査した結果、高等学校の部では、最優秀賞一名、優秀賞三名、佳作十三名の計十七名、専修学校の部では優秀賞一名、佳作二名の計三名を入賞者として決定しました。選考の基準として、

第一に実際に学校で学習していることや体験していること、学んだことを活用しているか
第二に学習の成果が将来の夢や職業観に結びついているか
第三に主張に一貫性があるか

そして、それらが自分の言葉で表現できているか です。

高校の部最優秀賞の「桂 栄光（かつら まさあき）さんの『遠回りした道の先』」には、高校に入学し、座学と実習の授業をとおして、理論と実践の経験を積み重ねた先に技術があることや知識を学ぶ楽しさを知り、将来、学ぶ楽しさを教える先生になりたいと、さらにその先の夢について、書かれています。

入賞作品に選ばれた、どの作品も高等学校や専修学校への

入学動機や現在、学んでいることや体験をとおして、学びを深め、過去を振り返ったり、現在の課題を実感したりして、将来の目標を明確に設定しています。そして、その目標実現に向けて、どのように取り組んでいくのか、チャレンジし続ける努力の姿勢が期待できるものでした。また、職場体験において、職場のスタッフや接した人々とのふれあいの様子が生き生きと描かれ、職業理解を深め、プロフェッショナルとして働くために何が必要かを考え、今後、取り組んでいく意欲が書かれています。歩き始めた道の角を曲がったら、その先に新しい目的地が見え、さらにその先には・・・と、体験をとおして学びへの目覚め、さらに学び続けることで将来の目標が明確になっています。

特に、高校生の作品には、学校の学びをとおして成長していることを感じられるものが多くみられました。専修学校については、プロフェッショナルになる専門的な学びと職場体験等について、自分の思いを自分の言葉で表現できる表現力をさらに磨いてほしいと思います。

入賞された皆さんは、本日の受賞をさらなる向上のきっかけとして、今後も様々な体験を積み重ね、感性を磨き、夢の実現に取り組んでいってほしいと思います。皆さん一人一人の未来が日本の未来です。

最後に貴重な体験を生徒や学生に与えてくださった地域・事業所・関係機関の皆様、温かく見守り下さった保護者の皆様、御指導をくださった学校関係の皆様に心より感謝申し上げます。

そして、今後とも、日本の産業界の発展のために、明日に生きる生徒や学生のために東京都産業教育振興会の本取組みが益々発展していきますよう、皆様の御支援をお願いし、講評とします。

東京都産業教育振興会

作文コンクール表彰式



平成 28 年度 作文コンクール表彰式（中学校の部） 12 月 16 日 東京都産業教育振興会

東京都産業教育振興会

作文コンクール表彰式



平成 28 年度 作文コンクール表彰式（高等学校・専修学校の部） 12 月 16 日 東京都産業教育振興会

中学校の部 最優秀賞

製品としての価値を考える

大田区立大森第一中学校 二年

大家 明日菜

「使いにくそうだね」

この一言は私が“ものづくり”を好きとは言えなくなってしまうたきっかけの一言であり、消費者として製品とどう関わっていくか考えるきっかけとなった一言でもある。

“ものづくり”に対して消極的になってしまったのは、小学校低学年のときに、図工で作ったものを見た友だちに「使いにくそうだね」と言われてしまったからです。自分は不器用なんだと思うと同時に、もう“ものづくり”なんてしたくないなあと思いました。

中学校に入ってもその気持ちは変わりませんでした。二期の家庭科の授業でエプロンを作ります。手縫いだけでなくミシンを使う作業がほとんどで、機械加工の苦手な私は憂うつでした。友だちが完成したエプロンを前に達成感に満ちあふれた笑顔を浮かべていました。でも、私はその輪の中に入らず、作品展で展示してはしくないなあという気持ちでした。とは言っても、長い時間掛けて作ったものなので、使ってみたいという気持ちもありました。持ち帰ってすぐに、身につけてみました。鏡の中の自分は達成感に満ちあふれた笑顔を

浮かべていました。さっそくこのエプロンで夕飯づくりのお手伝いをしました。実際に動いてみるといくつかの問題点に気付きます。まずは、このエプロンで一番こだわったデザインです。自分の好きな色のオレンジ色の布で作りました。この色が好きなのは、見ていると元気になる色だからです。これを着けて作る料理で家族を笑顔にしたい、そんな思いから選んだ色でしたが、油がはねたときにとっても目立つことに気がしました。そのシミを見ていると何だか暗い気持ちになり、これではオレンジ色にした意味がありません。よく考えれば、母にいつも言われていたことです。製品を選ぶときは、汚れが目立たない色にするといいよ。言われたときは聞き流していた一言ですが、実

際にエプロンを使ってみて、この言葉の重みに気付くことができました。また、ポケットの大きさにも問題がありました。エプロン全体のバランスばかりを考え、手のひらの大きさを考慮しなかったため、物の出し入れのしにくいポケットになってしまいました。最大の難点は、



中学校の部 最優秀賞 大家 明日菜さん

水に濡れるとエプロンの下の衣服までもが濡れてしまうことです。これでは何のためのエプロンかわかりません。身につけて嬉しかったのはほんの一瞬で、“ものづくり”はやっぱり好きではないという気持ちになりました。

そんな気持ちのまま、技術の授業で木工作品を作ることにしました。これは自分の使いたい作品の構想を練り、設計・製作のどちらも自分でやるというものでした。私はCDラックを作ることになりました。今まで友だちに作ってもらっていたときは、やる前から諦めていた機械加工も、しぶしぶですが自分でやりました。初めて使う機械も使っているうちに、慣れてきました。図工の授業との大きな違いは設計図があることです。設計図通りに作れば、大きな失敗をしないのです。木材をのこぎりで切断したときは曲がってしまい、これだと組み立てができないなあと心配していましたが、切りしろをとっていたので、その部分をベルトサンダーで切削することで、設計図通りの部品が完成しました。今までは、完成したときに「思っていたのと違う」という感情になりましたが、設計図通りの見た目の作品に仕上がったことで、今までに感じたことのない達成感を感じることが出来ました。

使ってみいたいというワクワクした気持ちで持ち帰ると、机の上にピタリ収まります。使う場所のことを考えて設計したので、当たり前なのですが完成したとき以上に嬉しかったです。このとき、ふとエプロンを持ち帰ったときのことを思い出しました。結局使ってみると、作らなきゃよかったという気持ちになるんだろなあと。案の定、棚の高さをCDラックの高さびったりにしてみました。出し入れがしにくく、

また、時間内に完成させることで頭がいっぱいで研磨の作業が不十分だったため、製作時間についてはもっと検討するべきだったと思いました。でも、不思議なのですが“ものづくり”はやっぱり好きではないという気持ちは起こらなかったのです。それよりも、次に作る時はどういう工夫が必要か考えられたことに対する満足感がありました。

先日、タンスを買いにいったときに、家族にどんなタンスがよいかと尋ねられ、こう答えました。「家全体の配色のバランスを考えたデザインと設置する場所の大きさを考えた方がいいんじゃない。それから、靴下など小物が入る引き出しは小さい方がいいから、大きさの異なる引き出しがついているタンスの方が使いやすいんじゃないかな。」それは、いろいろなタンスを使ってみて、自分にとってどんなタンスが使いやすいと、価値のあるものかを考える力が身についていたからだと思います。

これまでは「使いにくそうだね」の一言は、私が作った製品を全否定する言葉のように感じていました。でも今は「改良する」ともって製品としての価値が上がるよ」という意味のように思います。洗濯板が全自動洗濯機へと進化したのも、背景には「使いにくい」の一言があったからではないでしょうか。今回、技術・家庭科の授業を通して、製作者と消費者の立場を考えることができました。私たちの身の回りは、たくさんの製品であふれています。製品を選択するときには、さまざまな視点を持ち合わせていることが大切だと気付きました。そして、どんなに愛着のある製品でもいつかは壊れます。壊れたときにどういう製品に価値があるのか。これから

製品と関わる上で、身につけていきたい視点の一つです。皆さんはどういう視点が必要だと思いますか。

中学校の部 優秀賞

私と家族をつないでくれる手作りエプロン

大田区立大森第一中学校 二年

燕昇司 美 莉

1年生の家庭科の授業でエプロンを作りました。技術の授業で木工作品を作ったときは、誰のために作ろうか考えましたが、このエプロンは自分のための作品です。自分の体に合わせ、使いやすい大きさを作ります。でも、実際に作ったエプロンは、自分のためというよりも、家族のために作ったと言えるエプロンになりました。

私は、このエプロンを使って、家族のお手伝いをします。平日は習い事があるため、お手伝いをするのは休日です。自分のエプロンを使う前は、お気に入りの買ったものがありました。リボンのついたエプロンです。でも、エプロンを作ってから、母の手伝いをするときは必ず使うようにしています。リボンのエプロンを使っていたときももちろん、一生懸命にお手伝いをしていましたが、手作りのエプロンを使うようになってからは、いつもよりもやる気がでるような気がします。

母の手伝いと言っても、夕食のちょっとしたお手伝いしかできません。それでも母は喜んでくれます。そして、姉と兄にこんな話をしてくれます。「ママが見ていないところでも美莉は、いつもお家のことをやってくれるからすごく助かるんだよ。」と。その一言でまたお手伝いをしようという気持ちになります。

ある日、習い事が休みの日に母から帰りが遅くなるという連絡がありました。その日は、姉が夕食を作ってくれることになりました。私も姉の役に立ちたいと思ったのでお手伝いをすることにしました。ふと姉のエプロンを見ると、私と同じような作りをしていて、聞いてみるとやはり中学校の家庭科の授業で作ったものでした。同じような作りをしていても、姉のエプロンは売り物のような仕上がりました。それに比べて私のはというと、不格好すぎて一緒に並んでいるのが恥ずかしく、料理をしている間ずっと悔しい気持ちでいっぱいでした。ごはんを食べながら、姉にエプロンのことを聞いてみました。すると、小学校のときに母と一緒に作った経験があったのだそうです。だから、もう一度作ってみると美莉も上手に作れると思うよと言われ、ちょっとだけ安心しました。そして、次は姉よりももっとステキなエプロンを作ってみたいと思いました。そのためには、もっと手芸や裁縫など練習をしなければいけないなあという目標もできました。

また何日かしてから、肉じゃがを作ってみようと思い、レシピ本片手に作ることにしました。どうして肉じゃがを選んだかという、簡単そうだったからという理由です。いつものようにエプロンをつけ、作り始めました。味見をしたとき

に調味料の分量を間違えたことに気付きました。慌てて調味料を加えてみましたが、今度は濃い味付けになってしまいました。どうしようか焦っているうちに母が帰ってきて、そのまま夕食の時間になってしまいました。家族みんなが食べているのをドキドキしながら見守っていると、「おいしいよ」と返してくれました。その一言で、また作ってあげたいなあという気持ちになりました。

私が自分のために作った不格好なエプロン。友だちは褒めてくれたけど、もっとステキなエプロンを作りたいという気持ちになったのも、この不格好なエプロンのおかげです。それは、家族の笑顔を引き出すエプロンになったからです。このエプロンをつけて料理をしていると、家族が笑顔になる料理ができます。味付けがいまいちでも、きっと私が一生懸命に作ったエプロンをつけて、一生懸命に料理をしていることを認めてくれるからだと思います。次の目標は、一人暮らしをしている祖母のために料理をしてあげること。祖母も笑顔になってくれるといいなあと思います。

私の「ものづくり体験」は、「誰かのために」という社会貢献意欲を育ててくれたステキな経験になりました。二年生の家庭科ではエコバックを作るそうです。誰のために作ろうか、今からワクワクしています。



学ぶことの喜び

北区立明桜中学校 三年

鈴木 那奈

私は三年間、家庭科部として様々な作品を作ってきました。この三年間で、物作りの楽しさと、これからの人生において大切なことを学びました。

三年間で特に印象深く、心に残った作品は、中学三年生の時に作った浴衣です。浴衣は私がそれまでに作ってきた作品の中で最も難易度が高く、一番大きな作品でした。ですから、浴衣を作るということは、私にとって一つの挑戦となりました。挑戦した分、学んだことは多く、完成した時の達成感も大きいものでした。

全ての作品作りにおいて、丁寧に行うことは当たり前のことですが、浴衣作りでは特に、細かい作業を丁寧に行い、綺麗に仕上げるのが大切です。そのための作業の一つに「しつけ」があります。「しつけ」はミシンを使って縫う時に布と布がずれないようにするものです。これは大変な作業ですが、綺麗に縫うためには欠かせないものです。この作業を丁寧に行うことが綺麗に完成させることへ繋がります。私は、そのことを意識し、心を込めて、丁寧に「しつけ」に取り組みました。

また、和服ならではの「きせ」という方法を学んだ時、私

は日本人の和の心に触れることができたように思います。「きせ」は縫い目を表から見えなくするもので、この方法には、日本人の、和服を着た時の見た目を綺麗にできるようにという繊細な心遣い、和への気持ちが入められていると思います。私は、このような心を持てる人を尊敬します。また、日本に昔からの心が今も続き、このようにして感じられることを嬉しく思います。この「きせ」に学んだ、日本人の見た目から綺麗にしようという心遣いをこの先も忘れずにいたいと思います。

今回一番苦労したことは「くけ」という作業です。「くけ」は縫い代を始末するもので、洋服のミシンを使ったジグザグ縫いとは違い、浴衣などの和服では手作業でとても細かく縫っていきます。作品が大きいこともあり、気の遠くなるような作業でした。しかし、「くけ」をすることで着心地を良くすることができたため、これも一つの大切な作業だと思いました。

浴衣を作っている時は、完成が待ち遠しくて作業が進むたびに楽しさも増えていきました。初め、浴衣はそれまで作っていたバッグ等とは違い、大きいもののため、先が長く大変そうだと思いました。ですが、一つ一つの作業を進めていく内に形になっていき、一つの作業ができるたびに嬉しさも増していきました。これも物作りの醍醐味だと思います。そして、このように沢山の努力や思いが積み重なってできた作品が完成した時の達成感はとても大きく、私自身の自信にもなり、良い経験となりました。

私は、浴衣を作ることによって物作りの楽しさや嬉しさ、達成感

の喜びを学びました。また、作品作りを通して、日本人の快適で綺麗なものを作ろうとする心を知り、とても良い知識を身につけることができました。そして自分で実際に作った浴衣を着た時は、それらの喜びが込み上げ、とても豊かな気持ちになりました。

家庭科部では、これからの人生において、準備にこそ手は抜かないこと。何事も丁寧に行うことの大切さを学びました。そして、実際に作品を作ることによって物への愛着がわき、手作りの作品の温かみを感じることができました。三年生の文化祭では、心を込めて作った浴衣を展示することにしました。このことで、物作りの良さを多くの人が知ってくれると嬉しいです。

これらの部活動で、また学校生活で学んだことは、私にとってとても大きなものとなりました。私は今中学三年生で、将来について色々なことを考えるようになりました。今の私には将来の夢というものはまだ具体的にはありませんが、この三年間で学んだ事を生かし、自分に合う職業、なりたと思う職業を探すことにおいて、大切なことを教えてくださったのは教師の方々です。特に家庭科の先生は、授業以外にも部活動で沢山のことを教えて下さいます。その先生の話から人間関係やコミュニケーションにおいて大切なことを学びました。また先生はよく「将来ピアノを習ってみた



い。」とおっしゃっています。私は先生のその前向きな姿勢から、人生を楽しむということを教わりました。人に何かを教えるためには、多くの知識が必要です。私もこれから色々な知識を得られるように、勉強に励んでいきたいと思っています。高校生になってからも教わったことを糧にして、失敗を恐れず沢山のことに挑戦していきたいです。私が目指している高校は、今の私にとって少し難しいところです。ですが、自分の未来のため、充実した自分らしい生活を送るためにその高校を選びました。合格するためにも、しっかり勉強を積み重ねていこうと思います。今回浴衣を作った時のように、基礎をしっかり身につけ、一つずつ細やかな目標を立て、それを丁寧に達成していきたいです。このようなことの繰り返しを大切にすることで、高校合格への道が見えてくるのではないかと思います。これから先も、学ぶことの喜びを感じながら、何事も諦めずに取り組んでいきたいです。

中学校の部 佳作

技術科の意義

新宿区立西早稲田中学校 三年

真 田 礼 佳

「技術は生きる力だ。」

私の学校の技術科の先生がよくおっしゃっているこの言

葉、技術の授業を学習しはじめて三年目になる今、その言葉がやっと理解できるようになった。

私は、中学校に入学して最初の頃、小学校では学習したことの無い「技術科」という科目が何故あるのか疑問であった。そのとき、私がこの教科に抱いていたイメージはただ単にものでづくりをするだけの科目というものであったが、作品を作り上げる過程の中で、技術科の意義を見出すことができるようになった。

中学校一年生の授業では、材料と加工の領域で、木材を使ったものでづくりを学習した。私は、アイデアを図や線で表現することがとても苦手であったため、作品製作中心の授業を受けることは大変不安であった。しかし、心配はすぐに打ち破られた。

ものでづくりをしていく過程で、構想図の描き方や使う材料についての知識、道具の使い方など、初めて知ることが多く、学ぶことがとても多い授業であることを知った。準備の段階で、自分のイメージをしっかりと固めておくだけでも、実習がとてもスムーズに進んだときには、実習だけがすべてではないことに気づかされた。

私は、整理箱を製作したが、多くの時間をかけて完成させた、世界に一つだけの作品だと思うと、とても大きな満足感を得ることができた。自分で作ることができる喜びを味わうことができる科目は唯一技術科ではないだろうか。

技術を学習し、私は多くの知識を得ることができた。道具の使い方はもちろん、先生から聞くお話はどの内容も興味深く、その多くのことが生活につながっている。

例えば、エネルギー変換で学習した、日本国内に供給されている電気の周波数が、東日本と西日本では違うということを知ったときはとても衝撃的だった。このような知識は、技術科だからこそ得ることができると思う。技術科で習ったことは、どんな小さなことでも将来の生活に役立っだろう。

ドライバーひとつとっても、少しの力でねじを強く締めることができるドライバーがあることや、その他の工具の使い方やコツ等、毎回の授業で新しいことが学べる。さらに技術科は他の教科の得意、不得意に関係なく、多くの生徒が意欲的に取り組んでいる教科でもある。また、最終目標である作品完成までに、たくさん知識を得なければいけないが、これらの知識を総動員させ、作り上げた作品はとても愛着の湧くものである。

このようなものづくりによって得た満足感や喜びを、私は将来につなげて行きたい。何かを作るといふ仕事は、実際に現場で形を作り出す建設業や、服をデザインして世に送り出すデザイナー等に限ったことではない。形あるものだけがすべてではなく、人の笑顔を作り出すことのできる仕事にも、ものづくりと同じ様な喜びを味わうことができるであろう。例えば、人に何かを教えるという職業は、形あるものを提供しているわけではないが、わからないことや、まだ知らないことを教えることによって、達成感や新しいことを知れる喜びを与えることができる。私は将来、そのような仕事に就きたい。

ものづくりをしたあとには、必ず次回につながるヒントが生まれる。もし、失敗をしても改善点を見つけ、もう一度作

り直す。もし成功したならば、さらに工夫を凝らして再度チャレンジをしてみる。両者にはさらに良いものが生まれるという共通点がある。

良いものが生まれると、さらにレベルの高いことに挑戦しようとする向上心や、新たなことに挑んでみようとするチャレンジ精神が芽生えてくる。このようにものづくりは結果に関係なくやりがいを見出すことができ、より良い作品ができるサイクルがあると思う。

私の考える技術の授業は、生活を営んでいくうえで基盤となることを学び、自分を試すことができるものである。実習をかさねるごとに、今まで学習してきたことを応用し、さらにハイレベルなことにもチャレンジすることができる。そして、それらを繰り返し返すことによって、技術や新しいものを生み出そうという力が身につく。また、身についたことは将来に役に立つことばかりである。道具や工具の扱い方だけでなく、ものづくりによって得ることのできる喜びは、自分自身への自信につながり、向上心や探究心が生まれるであろう。

「作ることの喜び」は、生きていくうえで一番大切なことであると私は思う。だからこそ、作ることの喜び、ものづくりの喜びを感じることのできる技術は、「生きる力」であるだろう。

他の教科とは少し違うことを多く学ぶことができ、人間的にも大きく成長することのできる技術科は、私の大好きな教科だ。

職場体験で学んだこと

墨田区立吾嬭立花中学校 三年

石 森 真梨子

私は、二年生の時に中川南保育園という所で、職場体験学習をしました。その中川南保育園での職場体験で、学んだことが三つあります。

一つめは、いつでも笑顔でいるのが大切だということです。職場体験の一日目に、私が担当するクラスの先生に、「子供と話す時も、遊ぶ時も、いつでも笑顔でいてね。」と言われました。そう言われたときに私は、「そんなに簡単なことではないんだ、子供と接する時に笑顔なのは、当たり前でしょ。」と思っていました。しかし、体験が始まり、自己紹介をする時に、緊張して自分が笑顔ではないことがすぐに分かりました。意識して笑顔になると、緊張もだんだんなくなり、自然と笑顔になることができました。そうすると、子供たちも近くにきて、私に「遊ぼう。」と言ってくれて、一緒に遊んだり、話しかけてくれたりして、とてもうれしかったです。しかし、ずっと笑顔で子供と接することは、意外と難しく大変でした。保育園の先生を見てみると、子供と楽しそうに話していて、自然な笑顔でした。一日目の体験を終えて、思ったことがあります。それは、いつでも笑顔でいることは大変だけど、相手とコミュニケーションがとれるようになる、

ということでした。体験をして、自分が笑顔だと相手の子供たちも笑顔になってくれて、初対面なのに楽しく話していることに気づきました。どんな時でも笑顔になれると思わないけど、うれしい時に笑顔になれば周りも笑顔になるし、嫌なことがあった時に笑顔を意識すれば、前向きな考え方ができると思います。だから、笑顔になることはとても良いことで、皆が幸せになれるようなことだと思います。笑顔を意識して、これからも頑張りたいです。

二つめは、常に先を考えて行動することです。二日目は、ほぼ一日目にやったことの繰り返しなので、だいたいのか不安で、先生から言われたことや、簡単な仕事などしか自分からできませんでした。先生も忙しくて、何か頼まれることもあまりないので、子供たちと話しているのが主な仕事になりました。二日目が終わる時に、保育園の先生に、「お疲れ様。子供たちがたくさんいるから、あまり仕事頼めなくてごめんね。明日も頑張って。」と言われて、私は、先生に言われたことをやるのは当たり前だけど、自分でやることを考えて積極的に動かないとダメだなと思いました。三日目は、二日目の反省を生かして、なるべく自分から仕事を探してやっていくようにしました。しかし、勝手に自分で判断してやるのはよくないので、保育園の先生に聞いてから行動しました。先生は、「ありがとう。お願いします。」と優しく言ってくれて、自分に自信ができました。自分で探した仕事をやり終えると、子供達からも「ありがとう。」と言われてうれしかったです。常に先を考えて行動することは、これからの

生活にたくさん生かしていけることだと思います。何も考えずに言われたことだけをやっていたら、自分のためにもならないし、相手も大変なので、常に先を考えて、相手にとっても自分にとっても良いことをやっていきたいです。

職場体験で学んだことの三つめは、悪いことをしたら、しっかりと注意することです。子供達と話している時や、遊んでいる時、子供たちが私を後ろからたたいてきたり、おもちゃを使う順番をぬかしたりするなど、色々な悪いことをしていました。私がそんな子供たちをあんまり注意できず、困っていたら、保育園の先生が、「もっとしっかり注意していいよ。大丈夫だから。」と言って、その子供たちを叱ってくれました。その後、おもちゃを片づけない子供がいて、私がその子に「だめだよ。ちゃんと片づけなきゃ。次の人が困るよ。」と注意したら、その子も「はい。」と言って、おもちゃを片づけ始めました。保育園の先生や私が注意すると、子供達がちゃんと謝ってくれたり、言われたことをやったりしていたので、えらいなと思いました。どんな時でも、悪いことをしたら注意するというのは当たり前だけど、上手くできないものなので、誰かが悪いことをしたら、それをしっかりと注意できる人間になりたいです。これからの人生で、子供と接する機会はたくさんあると思うので、この経験は将来とても役に立つと思います。しっかりと生かしていきたいです。

私は今まで、将来のことを考えたことはあまりなく、将来の夢もまだありませんが、二年生の時に経験した職場体験学習で考えるようになりました。私は、どんな職業でも勉強していることは無駄にはならないと思うし、勉強することで、

将来できる職業の選択肢が増えると思っています。勉強だけでなく、職場体験で学んだ三つのこともこれからの人生に役立つでしょう。だから、今は興味のあることや勉強を頑張って、やりたいことを探していきたいです。今回お世話になった保育園の先生のように、誰かを笑顔にできるような、自分が好きで楽しいと思える仕事をしたいです。

職場体験の三日間が終わった時、達成感がありました。中川南保育園で職場体験学習をして本当に良かったと思います。



職場体験で得たもの

墨田区立吾嬭立花中学校 三年

中 崎 美 希

私は小さい頃からお菓子を作るのが好きでした。将来はそれを仕事にしたいと思っています。でも本気でパティシエになりたいと伝えたら親には反対されませんでした。が、祖母や親戚には反対されました。「好きなことをしてお金を稼ぐのは難しい。」と何度も言われ、将来、本当に仕事としてやっていけるのか、つらくても続けていけるのかと不安を感じていました。そんなときに学校行事で職場体験が行われることになりました。いくつもある選択肢の中から私は一番パティシエの仕事に近いと感じた和菓子屋さんを希望しました。そして希望通りの和菓子屋さんで職場体験ができることになりました。

職場体験を行う際には事前準備が必要です。同じ場所に体験に行く生徒は私を含め、三人いました。その中で私は班長をすることになりました。私は今まで班長やリーダーなどをやった経験が少なかったもので、とても不安でした。でも成功させたい気持ちと楽しみな気持ちがとても大きく、不安でも一生懸命にやろうと決めました。

事前準備で行う主なことは、体験場所の確認、体験先の方へのお電話での挨拶、体験先での当日の打合せの三つです。

職場体験では目上の方を相手にするので、普段あまり使わない敬語を失礼のないように使わなくてはならず、慣れない敬語を何度も練習しました。その成果もあり事前準備は何も問題なく終えることが出来ました。それから職場体験当日まではあっという間に過ぎていきました。

実際に体験した期間は三日間でした。その中で私は多くのことを学ぶことができました。特に印象に残ったことを三つ書きたいと思います。

一つめは掃除です。体験を行う際に一番初めに行う作業でした。体験先の方からは掃除のやり方はもちろん、気持ちの面や気を付けるべき点についても詳しく説明していただきました。特に体験先の方が言っていたのは「清潔感」についてです。清潔感が感じられ、お店に入ってみたいと思える掃除をすることを心がけてくださいと言われました。また店内がきれいではないと食事をしている時の気分が悪くなるので、外見だけではなく、室内も机やイス、ディスプレイのケースなども汚れや水のあとがつかないように丁寧に掃除をしました。掃除一つとっても、とても大切で、必要不可欠な仕事だと改めて感じました。

二つめは衛生面についてです。食品を扱っているので衛生面についてはきちんと管理していかないといけません。直接人の口に入れる物なども扱うので、手洗いはもちろん消毒も入念に行います。食品の安全が確保されていらないとお客さんが体調を崩してしまうかもしれません。そんなことは絶対あってならないので身なりをきちんと整え慎重に作業を行うことが大切でした。

三つめは商品の見た目についてです。どんなに味が良くても見た目が良くないとお客さんにはおいしそうと思ってもらえないので商品が売れません。売れないとどんなにおいしくてもだめになってしまいます。だからお客さんにおいしそうだな、食べてみたいかなと思ってもらえる見た目、ディスプレイを心がけているそうです。具体的にはどんなことを心がけているかというと、商品がよくお客さんに見えるように包装を多くしすぎない、きれいに整理して分かりやすくひと目で見て分かるようなディスプレイをするなどでした。趣味ではなく、仕事としてやっているのだから商品売するための工夫がたくさんされていました。

私にとって職場体験ができた三日間はとても貴重な時間になりました。将来、食品を扱うパティシエになりたいと考えていて、その職業のことを知れば知るほど、食品の扱い方や管理の仕方など、わからないことが増えていき、不安は大きくなっていきました。そんなときに手本となるような今回の体験は私の不安を少し軽くしてくれました。具体的な仕事内容を見ることがよって、今まで知らなかったことがわかったり、疑問点が解決したりしました。また、最終日には職人の方が「つらいし、大変なこと多いけど好きなことだから毎日すごく楽しいよ。」とおっしゃっていました。私はそれを聞いて、三日間大変なことやつらいことも多かったけど楽しかったなと、改めて感じることができました。そして、やはり夢をあきらめたくないと思いました。三日間の中で自信を得ることもできました。この貴重な体験を私は一生忘れないと思います。

やりがいを感じて働くこと

墨田区立本所中学校 二年

金 内 佳 乃

人はなぜ働くのか。収入を得るため、というのも大きいだろうが、それだけでは続かないと私は思う。やはり、やりがいを感じる仕事でなければ、仕事が苦痛だと感じてしまうのではないだろうか。

私は、六月に職場体験で保育園に行った。私は小さい子供が大好きなので、とても楽しみにしていたが、保育士の仕事は、私がイメージしていた仕事とは異なっていた。朝早くから登園してくる子供たちは、とにかく機嫌が悪い。特に二、三歳児は、何がそんなに気に食わないのか、と思ってしまいうほどだ。大泣きする子供たちを泣きやませ、わけのわからない遊びに付き合う。この時点で私はもう疲れ始めていたが、保育園の一日は長い。子供たちが園庭で遊んでいるのを眺めていたら、泥をかけられ、水をかけられ、シャボン玉の液もかけられた。保育士さん方は、そのたびに「やってはいけない」と教えられていて、これが毎日だと思うと、とても忙しいのだなと思った。部屋に戻ると、着替えだ。全員をトイレに行かせる。そして、お昼はもっと大変だった。好き嫌いが激しい子、まったく食べない子、遊びだす子。一人ひとりのそばに行き、励まして自分で全部食べてもらう。お昼寝の時間も

休けいはない。画用紙を切ったり、プールを掃除したりと、子供たちが楽しく過ごせるよう準備する。

このように、本当に大変で根気のいる仕事ではあったが、不思議と「やりたくない」とは思わなかった。それは、子供たちが楽しそうに笑顔で過ごしているからだ。自分が役に立ったと実感できる。これが、やりがいなのだ、と改めて感じた。

また、今回の体験から、礼儀正しくすることの大切さも感じる事ができた。あいさつをしつかりとし、ていねいな言葉づかいで話すことで、印象は良くなるし、信頼も得やすいのではないかと思う。あいさつもせず、いつも下を向き、ろくにお礼も言わず、汚い言葉で話す人は、誰だって嫌だろう。私も社会に出るとき、そんな人間にならないよう、気を付けたい。

自分がやりたい仕事を職業にするためには、やりたい仕事を選ぶことができる状態にしておく必要がある。つまり、選択肢を広げることだ。自分でできる仕事を見つけて、それがたまたまやりたかった仕事だった、ということはおそらく滅多にないだろう。いくつもの可能性の中から、やりがいを感じられる仕事を選び、意欲的に働ける方が良いと思う。私は、将来就きたい職業がまだはっきりしていない。だから、可能性を広げるため、いろいろなことにチャレンジし、勉強もしっかりしたい。私は意欲を持って働く大人になりたい。しかし、やる気になれない仕事もあるだろうし、やりたいという気持ちだけではできないこともある。そんなときも、やらない、できない、無理だ、と切り捨てるのではなく、そ

の仕事の良い部分を探すと良いのではないか。小さい仕事や雑用をバカにして、いいかげんにしているうちは、大きなやりがいを感じられる仕事はやらせてもらえないと思う。時には我慢して、地道な努力をし続けて、たどりついた成功は、とても大きな意味を持つのだろう。

職場体験を通して、「働く」ということについて深く考えられたと思う。それらのことをふまえて、私は、自分に合った職業に就き、たくさん努力して、意欲的に働きたいと考えている。そのためには、可能性を広げることが必要であると思うため、今のうちから、きちんとした礼儀作法を身につけ、しっかりと勉強し、部活にも全力で取り組んで、さまざまな経験を積み重ねていきたい。十年後、二十年後の私が、自分の生きがいとなるような好きな仕事をして、社会に貢献していたらいいな、と思う。



職場体験

墨田区立本所中学校 二年

横山 華子

「将来の夢はなんですか。」と聞かれても、私はいつも答えられなかった。まだ中学二年生の私には、十年くらい先のことなんて考えられなかった。

そんな中、学校で職場体験が行われることになった。私の友達はやりたい職種がもとから決まっていたようで、すぐに希望を決めていた。私はとりあえず、自分にもできそうな比較的簡単な仕事を希望した。

私の体験先は、図書室に決定した。事前に体験内容が伝えられた。「図書室の資料の配架、修理」としか伝えられなかった。私にもできそうだな、と思った。

そして、体験日が来た。初日は資料の配架と書架整理を行った。ただ本を並べて、棚の中を整理するだけだと思っていた。しかし、そうではなかったのだ。本が棚の奥に行って取りづらくならないように手前に置かれなければならなかった。そして、棚の奥にいつてしまった本を見つけたら、手前に引く。本のラベルに書かれている番号、著者名が順番通り並べてあるかどうか確認する。それが思いの外大変だった。そうするのも利用者の方たちのためだそう。私は、普段図書室を利用するときのことを思い出した。確かに本が取りやすくなっ

ていた。本を取りやすくするのは結構大変なんだな、と思った。また、この日は修理体験も行った。修理体験では、読みやすさを考慮した修理を行った。どちらかというと細かい作業が多く、思っていたより難しかった。

次の日は在庫処理体験というものをした。在庫処理とは、予約された資料を棚から持ってくる作業のことだ。私はまだ慣れていなかったもので、少し時間がかかった。資料を探すために図書室を歩き回ったので体力を消耗した。利用者が棚の前にいるときは、邪魔をしないようにその棚の資料は取らない、という気づきが見られた。また、体験先が地域のコミュニティ会館だったというのもあり、館内の飾りを作る作業も行った。私は不器用なので少し失敗もあったが、一番楽しめた仕事だった。

最終日は、配架、書架整理、在庫処理など行った。三日目になって、作業にも慣れた。だんだん作業が楽しく感じられてきた。仕事には楽しさもあるのか、と気づいた。ふと閲覧席を見たら、利用者の方々が席が埋まっていた。こんなにも利用してくださっている方がいるのか、と思い、それを見てやる気がわいた。

通路を通る時にも注意があった。利用者の方が通ろうとしたときは、道の脇で止まるということだ。確かにそうされると利用者としては通りやすい。そこまで考えられなかった。

その他の体験でも、利用者の方のことを考えた作業が多く感じられた。図書室での作業なんてきつと簡単だろうと思っていたが、違った。思っていたより疲れた。人のために働くのはこんなにも疲れるのか、と思った。でも、仕事が終わっ

た時の達成感がとても感じられた。

職場体験が終わり、通常の学校生活に戻った。みんなは事業所からいろいろもらったと騒いでいた。私は何ももらわなかった。でも、人の役に立つことができた喜びをもらったような気がした。

もし今「将来の夢はなんですか。」と聞かれたら、「人の役に立てるような仕事がしたい」と答えるだろう。まだ、具体的な職業は思いつかない。でも、どんな仕事でもいい。

今回の職場体験で、人の役に立てる喜びをよく感じることもできた。だから、多くの人が喜んでくれるような、少しでも世の中の役に立てるような仕事がしたい。そして、かげでこの社会を支えられるようになりたい。今回の職場体験を通してそう思った。

レモネード

大田区立大森第六中学校 二年

渡 辺 凛 葉

顔をゆがませる程すっぱいレモンが、体にしみる程甘く感じたのはなぜだろう。あの味を思い出たくて作ったレモネードを味見しながら、私は二日間の出来事について考えた。私は職場体験で、ヘアスペースディアンという美容室に行かせて頂いた。体験先が発表された時、将来の夢が美容

師とあって、美容室に二日間もいられるのは嬉しかった。美容師の仕事ってどんなだろう。どんなことを教えてもらえるのだろう。想像すればするほど期待がふくらんで、職場体験の二日間が待ち遠しかった。

仕事は、九時半に出勤しお店のそうじから始まる。鏡の汚れを落とすのがあんなにも大変だなんて思わなかった。ふくほどに汚れは広がって鏡に傷を与えない最大の力でこすらなければならぬ。スタッフさんが簡単にこなしている基本の仕事すらできない私はもういやになったけれど、「鏡は一番の商売道具」という言葉を聞き、与えられた重要な仕事に責任を持ち一生懸命やらねば、と思った。

十時になりピカピカの鏡の前にお客様が座った。お店のすみに立ち、どうやってはさみをいれるのか、ドライヤーはどのように持つのかなどを目に焼きつけるように見た。美容師の手の動きは流れるように美しく、お客様の希望を聞きながらセットしている姿は憧れそのものだった。昼休けいが終わリパーマを希望するお客様がいらしかった。私はアシスタントとして必要な道具を渡す役をやらせて頂いた。美容師さんが取り易いように、鏡越しに見ているお客様が不快にならないように。ただ紙とローラーと輪ゴムを渡すだけなのにどっと疲れがまじった。気づけば弁当を食べていた十五分以外ずっと立ち続けている。はきなれないコンバースはさらに私を苦しめる。でも、三人のスタッフさんは一分たりとも休まず笑顔で仕事を続けている。重そうなブーツを履いている足でさえ軽やかに見える。これが慣れというものなのだろうか。思ったよりも大変な仕事に私はすっかり疲れてしまった。二



日目の仕事は一日目よりも大変だった。昨日の説明がなくなった分、一気に仕事が増えた。サービス業である以上、雑な仕事は許されない。どんなに小さな行動にも、細心の注意を払わなければいけないのだ。時計の針が四時をさすころには、私はもうクタクタだった。荷物をまとめてスタッフルームに行った私はイスに座りこんだ。のどがかわいているのに水筒を忘れたから飲めない。予知能力の低すぎる自分に腹が立った。でもその時、ガラガラと音がして私に向かってコップを差し出しているスタッフさんが入ってきた。歩くとび涼しげな氷の音とほのかなレモンを香らせるガラスのコップ。「どうぞ」と差し出されたレモネードは優しい香りで満ちていた。少しすっぱいレモンは、疲れた体にしみるように広がって甘い味を残して私ののどをうるおわせた。幸せそうにレモネードを飲む私に、少し怖かったスタッフさんは言った。「このレモネードがおいしいと思うなら、それは頑張った証だよ。二日間お疲れ様。」

と。その優しさと温かさで満ちた空間で、私は美容師に対する憧れをふくらませていた。

働く、ということ。それは決して楽なことじゃない。楽し

いと感じる瞬間もあるけれど、それと同じ数だけ辛いこともある。美容師という仕事は、おなかなかった、水飲みたい、足疲れたという自分の感情を殺して、常にお客様のこ

とを一番に考えなくてはならない。それでも、仕上げた後の嬉しそうな顔や、ありがとうという声が聞けるから仕事を続けられるのだと思う。喜ばれる仕事と周りからは見えない仕事。歯を食いしばって頑張る人がいるから世の中回っているのだろう。改めて働くということについて考えさせられた。

将来の夢について語れる中学二年生はどのくらいいるのだろうか。私はまだ美容師になりたいというのが確定した訳ではない。でもこの体験を通して働くことの大切さを学べた気がする。私が仕事に就いた時、どんなに小さくても世の中を回せる歯車になりたいと思った。スタッフさんから頂いた「大切なのは挑戦する心」という言葉を胸に、私はレモネードを飲みながら二日間の出来事について考えた。

つくることの喜び

世田谷区立烏山中学校 三年

佐藤 杏香

中学から始めた吹奏楽。吹奏楽では、仲間と一緒に一つの音楽をつくるのが主である。先輩の演奏を聴いて、

「凄く格好良い！私もこんな風になりたい。」と思ったのが始めたきっかけだが、今では部活が無い日は朝から憂鬱になるほど、仲間と音楽をつくっていくことが楽しくて、好きで、幸せを感じている。たとえば、定期考査前の一週間。たかが

七日間だが、されど七日間。土日に吹けないだけでうずうずすることがあるのに、七日も連続して吹けないのは辛い。経験など全く無く始めた吹奏楽だが、私の中で大きなものになっていくんだと思う。

音楽をやっていて嬉しいと感じるときは、上手くいったと思えたときや、イメージや気持ちがそろうたと感じるときだ。気持ちが一つの方向に向かっていけば、その音楽は自然とそろうって聴こえると思う。

「ここだけは外したくない」「絶対にそろえる」「みんなです合わせる」

などの強い気持ちがあって演奏しているときは、言葉にしなくても音からその人の気持ちが伝わる。自分たちの音楽を聴いている人が、演奏者から何か伝わってくると感じられることが大切だと思う。表現したいことが伝わる音楽をつくるための近道はない。とても難しいけれど、気持ちを大切にしていきたいと思う。私は吹奏楽で音楽をつくることで、色々な人と出会いがあった。自分が全く発見できず、考えもしなかった角度からの指摘をしてもらえたことで、

「こんな考えがあるんだ。」

と気づく場面もあった。音楽をやっている人として、憧れを持つ人との出会いもあった。そんな「人との出会い」は音楽をやっていないければ得られなかったと思うから、やっていて良かったと感じている。また、音楽をつくることで、「みんな一つのものをつくる難しさ」を知った。難しさ、と一口に言っても実際に自分が体験してみないと分からないことが多い。例えば、一つの曲をつくるとき。その曲のイメージや

強弱がそろっていないければ、まとまった音楽にはならない。だが、人それぞれもちろん考えは異なる。それらをそろえていくときの呼び掛け方、全員ができるのか、など、個人競技ではないため色々な所に壁がある。個人練習で全然上手いはずに嫌になることもある。でも、上手くいったときの「できた！やった！」という達成した際の気持ち良さを、一度感じることであれば、何度やっても上手くないときでも努力を続けることができる。吹奏楽を始めたことで、達成感を得たときがどんなに気持ち良くて嬉しいものかを知ることができたと思う。さらに、指も口も痛くなりながら努力した結果が評価されたときは、自然と涙が出てくるものなのだということも音楽を始めて分かったものの一つだ。

では、その「評価」について考えたい。私はこの夏を通して、「評価は2つある」ということを教わった。これは、音楽をつくることに関してだけではない。どんなに小さなことでもいい。自分が何かをやり終えたとき、それに対する評価には、「周りからの評価」と「自分での評価」の二つあるということだ。では、「二つの評価」にはどういった違いがあるのか。私が経験した吹奏楽コンクールにおいて考えてみる。まず、「周りからの評価」とは、いわゆる「賞」のことである。金賞、銀賞、銅賞など、自分たちの音楽を聴いた人からの評価だ。これは、それまでの過程や自分たちの気持ちとは一切関係ない。一方で、「自分たちの評価」とは、本番までに積み重ねてきたものがどのくらい出せたか、自分たちが表現したいと思っていたものが思うようにつくれたか、今までの練習はどうだったか、などである。つまり、それまでの過程や

自分たちの気持ちを含めた評価であるといえる。この二つの評価のうち、本当に大切にすべきは「自分で評価」だと言われた。なぜなら、自分で評価から良かった点も反省点も含めて、次に繋げていくものを見つけて、残りの時間をどう過ごしていくのかが大切だからである。正直私は、「周りからの評価」を受けたらそっばかり考えて、「自分で評価」は簡単に考えていた部分があった。でも、話を聞いて、「自分で評価」は真剣に自分と向き合うべきだし、疎かにしては残りの時間もったいないと思うようになった。それは、三年生になりあと半年しか残りの時間がない、という事実を言われたことではっきり思った。半年後、振り返った時、心から部活をやっていて良かったと言えるようにしたい。そのために、このかわりを持って練習し、残りの時間、もう二度とない今のこのメンバーでの音楽をつくっていききたい。



働くこと

世田谷区立烏山中学校 二年

廣 末 真 寧

私は、三日間の職場体験で保育園に行ってきました。これをもとに、働くことについて考えてみます。

まず、働くことは社会の役に立っているということです。私の行ってきた保育園では、主に子どもを預かるという仕事をしていました。これは、働いている子どもの親を助けることでもあります。他にも、スーパーでは商品売り、お客さんの生活に役立っています。病院では、患者さんを治しています。このように、ただお金を得るだけでなく、全ての仕事は社会の役に立っていることが分かりました。

次に、自分で働いてお金を得て生活するということです。自分で生活するということは、自立することだと思えます。働くことは、人が自立するための手段でもあります。

また、職場では人と関わり、協力するというのが必要です。職場の人は毎日変わるわけではありません。つまり、特定の人と協力することになります。気の合わない人でも、工夫して上手に関わらないといけません。包容力、忍耐力もいると思います。学校でも、クラスという限られた人たちの中で、日々どうやって関わっていくかを学んでいます。しかし、気の合わない人とは関わらないこともできます。今のう

ちから気の合わない人とも工夫して包容力と忍耐力を強く持つて接していこうと思います。

働くというのは、自分の生きがいを見つけないということでもあります。自分の好きな仕事は、とくに生きがいを感じると思います。職場体験の際、小さい子が好きな人は保育士になりたいと言っていました。私は小さい子が苦手で、なかなか楽しいとは思いませんでした。今の時点では、私には保育士はできないと思いました。園長先生は、保育士になるには子どもが好きというだけでなく、意志が必要だとおっしゃっていました。その仕事が好きというだけでなく、一生涯やるという気持ちがあるようです。

今回、保育士には向いていないと思った私ですが、学んだことはあります。一つめは、相手の目線に立って話すことです。分かってあげようとする気持ちが大切です。二つめは、辛抱強く時間をかけて接することです。どの保育士さんも、注意するときでさえ怒ったりせず、優しく丁寧に注意してあげていました。三つめは、冷静に状況を判断することです。保育士さんは全体を見て、遊ぶ場所が安全か確認したり、暑いときには全員が水分補給をしたかを確認したりしています。どんな仕事でも、学ぶことはたくさんあると思います。私は将来、医者になろうと思っています。簡単になれる仕事ではありません。もっと勉強しないとなれないと思います。今はまだ、自分が医者に向いているかどうか分かりません。患者さんに信頼される医者になれるよう、努力と根気を継続していけば良いと思っています。なりたいという気持ちに実際の力が追いつくように頑張りたいです。

ここまで働くことについて考えてきましたが、仕事に就くために、学校で学んでいることが活かすことに気づきました。時間を守ったり、期日までに提出物を出したり、人と関わりたりなど、毎日の繰り返しですが将来に役立つと思います。学生を終えれば働かなければならなくなりますが、今回お世話になった保育園の先生がおっしゃったように、ちゃんと意志をもって職に就きたいです。一生やり続けるという覚悟をもてる仕事を見つけて頑張りたいです。また、この作文を書く中で一番思ったのが、人は人に影響されながら生活しているということです。どの仕事も人に影響をもたらしていて、一人一人の仕事が集まって社会ができていると思いました。そして、働くことの重みを感じました。働くようになるまでにしっかりと勉強し、根気と努力を継続して、社会の一員になりたいです。

働くことの喜び

世田谷区立烏山中学校 三年

和田 奈々穂

「働く」それは、私にとってお金を稼ぐためだけのものだと思っていました。しかし、それだけではないと思い始めました。私の両親は舞台照明の仕事で日本中をたび回っていました。だから、少しだけ寂しい思いをしたこともありました。



それを知っていた母は何度か私を仕事に連れて行ってくれた事があります。私が見た照明の仕事は舞台上の役者さんなどを照らすだけで、舞台にも上がらないし、役者さんのように拍手をもらうことはありません。でも、そんな裏方の仕事が舞台を支えているのを間近で見たときに私はとても感動し、かっこいいなと思いました。でも、そういうかっこいいと思うのは客観的なもので、それ以上に私が想像もつかない程の苦労もあると思います。それでも、両親が照明の仕事を今でも続けているのは、そういった苦労よりも大きな喜びややりがいがあるからでしょう。だから、私は「働くことの喜び」を両親に聞いてみました。

母は「来てくれたお客さんに来てよかったと言ってもらうこと」というだろうなと思っていました。しかし、私がこの質問をしたときに、真っ先に母が出した答えはこれではありません。お客さんのことを一番に言うだろうと思っていた私はとても驚き、すぐく印象に残っています。そして、母は仕事の喜びについて、「ピッタリ合った瞬間」だ、と言いました。「合う」というのは舞台上のタイミングと母の照明のタイミングのことです。たったそれだけと思うかもしれませんが、その一瞬が母は「奇跡」だと言っていました。ボタンを押してから光が照らされるまでの、ほんの少しの時間差を考えて、演者の動きと同時にスポットが当たるというのは簡単そうでとても難しいことです。「大

体タイミングがそろったということではなく、まるでその演技や演奏の一部になったかのようにピッタリと合うと自分でも鳥肌が立つ」と母は言いました。たまにしか起こらないこの奇跡は苦しい思いも上回る程、母にとっては意味のあることなんだと思います。

同じ照明の仕事をしている父は「ピッタリ合う」ということにそこまで、こだわりはありませんでした。そのかわり、「人との関わり」の事を話してくれました。照明というのは、単独ではただの光にすぎません。光が当たる演者がいる事で照明は成り立ち、「総合芸術」の一部になるのです。しかし、照明がなかったら、舞台上は真っ暗で、演者がどんなに良い演技や演奏をしても見えなければ、ないのと同じ事です。だから、照明は舞台の仕事にとって「なくてはならない存在」という事になります。そのため、たくさんの人と関わり、話し合う必要があるのです。自分はどうしたいとしっかり言い、演出家などの話し合い相手の意見も汲み取って、最終的にはそれを実行に移さなければなりません。演技を見て演出家の意図をさぐって照明の参考にするために、お金がもらえる訳でもないのにわざわざ稽古も見に行くそうです。父はそういう「人との関わり」がおもしろいと言っていました。照明はただ光を当てて明るくするのではなく、舞台上の空気感を作る役目があるんだなと思いました。

私は両親の話聞いて、「働く」という事のイメージが変わりました。母が言ったピッタリ合った瞬間というのは成功し上手くいった瞬間であり、自分を褒められる瞬間だと思います。それは、誰のためではなく、自分の成功のために頑張

れるという事です。だから、とてもやりがいがあるし、自分の気持ちがお客さんにも伝わりやすいと思います。自分のためにやる事が人のためにもつながるのかなと気づきました。父が言っていたように照明は人との打ち合わせも大事です。たぶん、それはどんな仕事でも同じだと思います。たくさんの人と支え合って成り立っているのでしょうか。話し合いに必要な話す力と聞く力は「人との関わり合い」にとっても重要な事です。私は自分の意見を言うのが苦手なので、まずそこを克服していきたいと思います。これから、自分の将来や職業について考える機会が増えるので、長く続けられ、両親のように「働くこと」の喜びを感じられる仕事につきたいです。

技術のラジオ作りで学んだこと

北区滝野川紅葉中学校 三年

古川 陽介

技術の授業で、手回し発電機と電池の両方で動くラジオを作った。このラジオには、ほかにLEDライトや太陽電池など様々な部品があったため、回路が複雑になっていた。一つ一つの部品を基板に取り付けるために、はんだごてを使って、はんだづけする作業を何度も繰り返しした。さらに、基板と本体を取り付けるために、ドライバーを使って、大きさの違うネジを本体に取り付けた。ほかに、正常に作動するか

確認したりと、様々な作業を行った。

しかし、すべての作業がスムーズにできたわけではなかった。はんだをつける位置を間違えてしまうことが何度もあった。さらに、取り付けるネジの大きさを間違えてしまったり、それらのネジを技術室の床に落としてしまい、床を何度も探した。ラジオの完成までとても時間がかかってしまい、居残り作業を続けた。最後の工程を終えた時はとても嬉しく、安心感があった。そして、発電機のハンドルを回してラジオの音声がかえてくると、飛び上るほど嬉しく、同時に大きな達成感があった。

はんだづけをしている時や、ネジを取り付けている時を思い返すと、細かい部品同士をつなぎ合わせるために、一点にとっても集中していた。時間を忘れてしまうほど作業に熱中していて、ふと顔を上げたら、あと少しで作業終了時間になるところだったということが何度もあった。母が授業公開で技術のラジオ作りをしていた私を見て、あんなに集中しているところを久しぶりに見た、と話していた。

何か作品を作り、完成した瞬間の喜びや嬉しさ、達成感や安心感は、何事にも代えがたい。ラジオを作って、過去の様々な発明者もこのような感情を持っていたはずだ。しかし、作品を完成させるためには、一人の力だけでたどり着くことはできない。お互いに話し合い、修正点を見つけ出すことで、さらに良い作品が作れるはずだ。実際に、ラジオを作った時にも技術室でクラスみんながそれぞれラジオについて話し合う声が途切れることはなかった。部品の取り付けがうまくできなかった時には、なぜこの方法ではうまくいかないのか



友達と話し合った。また、ラジオが完成した後も、うまく作動しないときには、一旦分解して、回路を何度も確認した。そこでも、うまく作動しなかった原因について友達と話し合った。改めて、仲間と協力することの大切さを実感した。そして、組み立て直したラジオをもう一度作動させて音が聞こえてきた時、「ワッ」と歓声が上がリ、クラスのみんなの顔には笑顔があふれていた。仲間で協力し合って成功させたことは、これから将来過ごしていく中で決して忘れられない大きな喜びになるはずだ。何か作ろうとした時にも、この時の喜びを胸に留めて挑戦していきたい。私も、はんだづけやネジの取り付けで何度も失敗した。その度に、友達と話し合って修正点を探った。また、そこで新たに動かなかった部分とは別に、修正点を見つけることができた。自分一人では気付かなかった部分が友達と協力することで、他の間違えをなくすことができた。ラジオ作りを終えて大切だと感じたことは「根気強く作業する」ということだ。うまく作動しなかったら何度でもやり直す。諦めない気持ちを大切にしたい。作業をしている時、ずっと「楽しい」と感じていた。この「楽しい」という気持ちがあったからこそ、最後まで作業ができた。

今回のラジオで使用した太陽電池は、石油代替エネルギーの中の新エネルギーだということも学習した。石油の枯渇が懸念される中、環境保全が急がれているという。石油がなくなってしまうことは、

私たちにとって遠い未来のことではない。太陽光発電のほかにも様々なエネルギーが、石油の代わりとして期待されている。未来を生きていく私たちが、このようなことについて学ぶ事は、とても大切だ。再生可能エネルギーに関心を持ち、それについて知ること、環境保全につながっていくのではないだろうか。

技術の時間の授業で学んだことは、未来につながる。経験したことを社会に出ても思い出し、様々な場面で使えるようにしたい。

体験から自分の進路へ

足立区立江南中学校 二年

内 田 杏 菜

楽しかった事、悲しかった事、嬉しかった事、辛かった事、十三年生きてきた中でたくさんの思いがありました。そんな私は、中学二年生になり、もうすぐ、中学校生活の折り返し地点です。そのため、進路について考えていかなければならない時期になってきたと感じていました。しかし、私は、自分に自信がありません。色々な場面で自分の意見を言えず、悔しい思いをしたことが何度もあります。また、すぐに失敗している自分を想像してしまいます。私自身、そういう積極性が足りないところやマイナス思考なところが、自分の短所

だということを理解しています。しかし、直すことはできず、しょうがないと思うようになっていました。だから、進路に関して、とても不安でした。

そんな時、総合の授業で、二日間の職業体験が行われました。私は、自分が通っていた小学校で体験させていただくことになり、お世話になったところで体験できるのはとても嬉しいと感じました。

体験では、特別支援学級に付き添い、授業に参加して、お手伝いさせていただいたり、主事さんのお仕事である、校内の清掃をさせていただいたりしました。一日目は、私の短所である、積極性が足りないせいか、動けずにいきました。また、マイナス思考のせいか、自分は邪魔なのではないかと思ってしまいました。ですが、学級の子全員に「楽しかった」と言ってもらえたり、先生方からも、「毎日来てほしい」などと言っていただけで、自信を持つことができ、二日目は、自分から動けるようにもなりました。そして、最後は、お別れ会を開いていたとき、一人ずつ感謝の言葉を言ってもらえて、とても嬉しかったです。また、主事さんのお仕事は、暑い中での清掃だったので、とても大変でした。それを毎日やっている主事さんが、すごいと思うのと同時に、普段私たちが、当たり前のように過ごせるのも、色々な方々が関わってくださるからこそ成り立っているのだということを改めて感じました。そして、何よりこんな私でもお役にたてたということが一番嬉しかったです。

二日間の職業体験は、あっという間でした。とても楽しかった反面、大変な部分もありました。しかし、その分この

貴重な体験で、私は「働く」ということについて、学ぶことができました。「働く」ということは、とても大変な事ですが、やりがいを感じることが出来るものだと思えていた。だから、これからこそ感じる事ができました。

職業体験をさせていただいて、私は、学習に対しても意識が変わったと思います。今までは、定期考査などのテストで、自分が満足できるような結果を出せただけで納得してしまう自分もいました。けれど、職業体験を経て、自分の視野を広げることができ、今までの視野の狭さに驚きました。結果だけでなく、過程も大切だと感じるようになったのです。そう考えると私は、テストを受けるための過程で、満足できたことは、正直ありませんでした。いくら結果が良くても、もってやっておけば良かったなどと思うことが多々ありました。また、そのテストなどの結果も、結果と言っていますが、全て職業に就くため、自分で生活していくための過程だということにも気づきました。だから、その一つひとつの過程を大事にしていきたいです。

私は、職業体験という貴重な体験で自分の短所をしようがないと言って逃げず、変えたいと思うことができました。また、今まで狭かった視野を広げることができ、自信を持つことができたと思います。これからは、その体験や思いを自分の進路と重ね合わせて、真剣に向き合っていきたいです。

私の夢

東村山市立東村山第四中学校 三年

寒 河 りまな

私は、二年生の十一月に学校の授業の中で職場体験に行きました。私の職場体験先は、お菓子を入れる箱の折り畳みやダイレクトメッセージの袋詰めを行っている小さな工場です。工場というと、たくさん機械が使われているところを想像しますが、私が行ったところは違います。作業は全て手作業で行い働いている人は三十人程です。また、一般的な職場と大きく違うところが一つあります。それは、働いている人のほとんどの人が、障がいのある人たちだということです。初めて職場体験先に行ったときは正直驚きました。どうやって仕事をしているのか、ここに来るまでどのような生活通っているのか、他の人とのコミュニケーションはどうしているのかなど疑問もたくさん浮かびました。しかし、二日間一緒に仕事をしていく中で、障がいのある人たちと接することになったというよりは、接し方の方法を自分の中で見つけ出せました。その方法は二つあります。

一つめは、質問されたことにはちゃんと返すことです。当たり前前のことですが、初めはこのことが、当たり前前にできませんでした。なぜなら、質問されても聞き取りにくいこともあり、どうコミュニケーションをとれば良いのか分からな

かったからです。そのため、「はい。」と答えることしかできませんでした。けれども、これではダメだと思い、「はい。」と答えた後にもう一言足してみたり質問を返したりしました。そうすることで、たくさん質問や会話をしてくれるようになりました。

二つめは、困っているところを見つけたら手伝うことです。仕事をしているときやご飯を食べているとき、色々な場面で見ついているところを見かけたりしました。手伝ってあげてもお礼の言葉は返ってきません。普段だったら何で手伝ったのに、と思うこともあるかもしれません。私ならそう思います。しかしながら、このときは不思議と全くそういうことは思いませんでした。手伝った後の「あ、分かった。」というような表情、行動を見るだけで、手伝って良かったなという気持ちになりました。それが、この仕事のやりがいであり、ここで働いている職員の人たちの喜びなのではないかと感じました。

職場体験二日目のとき、一人

の女の子が作業を間違えてしまい、職員の人に注意されました。すると、その女の子は泣き出し、作業を止めて席を離れてしまいました。誰か、声をかけに行くと、仕事に戻るようにならずにはいられないのではないかと、思っていたら、いつも一緒にいる友達が無言で行きました。二人は少し話した後、仕事に戻り



ました。私は、つい泣いてしまったのは、注意されて嫌になったから、慰めに行くのは職員の人だろうと勝手に考えてしまいました。けれども、それは、障がいのある人たちに對しての私の偏った考えだったということに気が付きました。私が頭の中で、勝手なイメージをつくり出していただけで、本当はその考えは間違っていました。友達が泣いていたら励ましてあげる。これは障がいがある、なしに関係ないことであり仲間の大切さにも気が付くことができました。このできごとは、同じ仕事場で働く人同士で築きあげた友情があったから起こったことであり、私の考えを覆されたできごとでもありました。

この職場体験は、私が今もっている夢を目指そうとしたきっかけの一つです。私の夢は、医療関係の仕事に就くことです。今は、医療関係という幅広い職業を目指していますが、徐々に方向性を決め、一つの仕事に絞っていかると良いと思っています。医療関係の仕事をしていく中で、人の命を救ったり、今回の職場体験先の人たちのような障がいのある人たちのサポートなどができれば良いなと思っています。また、その中でたくさんやりがいを見つけていきたいです。そのためにはたくさん勉強しなくてはいいけません。そして夢を実現し、たとえ辛いことがあったとしても、どうしてこの夢をもったのか、今回の職場体験先のできごとを思い出し乗り越えていきたいです。そして、医療関係の仕事をしているところを想像しながら、夢に向かって頑張ります。

好きこそ物の上手なれ

東村山市立東村山第四中学校 三年

関 口 遼 祐

僕は家族旅行で、その地方にある鍾乳洞に立ち寄ることが多くあります。初めて鍾乳洞に入ったとき、自然が作り出した不思議な空間に、幼い僕は圧倒されつつも、心ひかれたのを覚えています。その影響もあってなのか綺麗な石や鉱物を集めるのが好きでした。幼い頃から集めたそれは、様々な色や形、模様があって、見ていて飽きることがありませんでした。

小学校四年生のとき、本屋でとても興味のある本を見つけました。思わず足を止め、見本の本を夢中で読んでいる僕を見て、祖母がその本を購入してくれました。プレゼントをもたらえる時期ではなく、普段買ってもらえる本よりずっと高かったのも、手に入れることを諦めていた僕は、とても嬉しかったのを覚えています。その本の題名は、「元素図鑑宇宙は92の元素でできている」です。この本には、人間や自然、すべてのものが元素からできていることが書かれています。この本をきっかけにして、すべてのものの元となる元素にも興味を広まりました。

中学生になり、自分の進路を考える授業が増えてきました。理系の勉強をしていきたいと、何となく目標が出てきた頃、

技術の授業で、スズとビスマスの合金でキーホルダーをつくる課題がありました。この合金は、低融合金で他の金属と比べると、融点が低いという特徴があることを思い出しました。前に調べたことのある物質の加工が実際にできることで、つくる前から内心ワクワクしていました。それと同時に、良いものをつくりたいという意欲と、かたちへのこだわりが湧いてきました。

僕はどうしても自分の名前の漢字の一字を筆書きのような字体でつくりたいと思いました。この課題は一人二つまでつくることが出来ます。時間に余裕があれば、イニシャルを二文字つなげたかたちのものをつくろうと考えました。筆文字のような漢字の下書きがやっとでき眺めていると、溶かした合金がうまく鑄込めるかが不安になりました。選んだ「遼」の文字は、画数が多くどうしても線の幅が細くなってしまうからです。溶かした合金を鑄込むためには、一つひとつの線をつなぎ合わせておく必要があります。悩みながら文字を眺めていると、逆さから鑄込めば上から鑄込むより注ぎ口が広く全体に行き渡りやすいと気付きました。しかし、はらいの部分为上に向いてしまうという難点があります。考えた結果、はらいは下向きではなく横にはらうことにしました。下書きを完成させるまで、長い時間がかかりました。

そして、いよいよ鑄型づくりが始まることになりました。そこで、また大変なことに気付きました。文字をつなげた中央の部分が細かなパーツになって別れてしまうからです。板に挟むときにも注意しなければなりません。ずれないように型抜きしたパーツを下敷きの上に乗せたまま、クリアファイ

ルの中に入れておきました。

こんなに考え、注意を払った作品は初めてでした。一つめの鑄型ができたので、二つめもつくることにしました。「遼」の文字に苦労したせいか、二つめは半分以下の時間で完成させることができました。いよいよ溶かした合金を型に鑄込むとき、ちゃんと合金が行き渡るか不安でした。待っている間は失敗したら嫌だなという気持ちで、心がいっぱいになりました。

自分のこだわりがかたちになってできあがったときの達成感は忘れられません。後は磨くだけです。思いの強い作品なので、最後まで手を抜くつもりはありません。この課題に、ここまで力を入れたのも自分の好きな分野だったからだと思います。中学校での様々な学習や高校見学を通して、僕の興味は科学技術の分野に向いていることが、はっきりしてきました。

僕が今回の作品づくりの体験や進路について母に話すと、「好きこそ物の上手なれだね。」

と母が言いました。最近の僕の興味は、化学物質やバイオテクノロジー・エコテクノロジーの分野まで広がりがつつあります。何となく興味のまま、本を選んだりインターネットで調べたりしていましたが、この母の言葉で、何となくではなく、幼い頃からこの興味は続いていたのだなと気付くことができました。

漠然としていたこの思いを振り返るきっかけとなった今回の課題に感謝しています。これから興味のある分野をさらに深め、ゆくゆくは現在問題視されている地球温暖化を防止す

るような研究や自然にやさしい研究に携わっていききたいです。

私の将来の夢

東村山市立東村山第四中学校 三年

細 淵 さくら

私の将来の夢は、幼稚園の先生になることです。なぜなら、私は小さい子供が大好きだからです。小さい子供が笑ってくれると、私も笑顔になります。

私が幼稚園の先生という夢をもつきっかけをくれたのが、私が幼稚園に通っていた時の担任の先生でした。私が、遊ぶ相手がいなくてさびしそうに一人でいると、そばに来て私の話し相手になってくれました。時には、けんかや悪いことをして先生に怒られることもありました。先生は、誰に對しても笑顔で対応してくれる優しさをもちつつ、だめなことはだめだとはっきりと言う厳しさももっている人でした。そんな先生は、園児達にとっても人気がありました。私にとって、先生は今でもあこがれの存在です。卒園後、私が将来幼稚園の先生になりたいと伝えると、先生は笑って応援してくれました。とてもうれしかったです。

卒園後、私の妹と弟が幼稚園に入園しました。妹と弟の付き添いで、私は卒園しても幼稚園へ行くことができました。行く度に、私が一番楽しみにしていたことが、園児達との触

れ合いです。私は園児達と楽しく触れ合うために、たくさん遊びを考えました。私がつくった紙芝居を読んだり、園児達が好きなキャラクターの絵を団扇や紙に書いてあげたりしました。園児達は、笑顔になって、とても喜んでくれます。私は、園児達の笑顔を見て、考えた甲斐があったうれしく思います。そして、色々な園児達にも楽しんでもらうには、どうしたら良いかと考えます。私は、他にも幼稚園の行事に気合いを入れていました。特に手作り教室です。手作り教室では、どんぐりやまつぼっくり、折り紙を使って、作品を作ります。作っていると、誰も思いつかない作品を作りたいという気持ちがわいてきます。まるで、自分も園児にもどった感覚でした。幼稚園の行事は、自分の過去をふり返ることができ、園児達の好奇心の旺盛さや考えがとても理解できます。私にとって、幼稚園はこだわりのあるところです。だから、私は幼稚園の先生という仕事に魅力を感じます。

私は、家庭科の授業で、「幼児の心身の発達と生活」について学習しました。幼児は、体が成長するとともに、人との関わりを通して、社会性を身に付けます。だから、幼児の身近にいる人や家族が、幼児の成長にとって大切な役割を果たしています。私は、学習して反省したことがありました。言葉遣いについてです。私には、妹と弟がいます。妹と弟は、よく私の真似をします。妹と弟が幼児であった時、私はイライラすると、「うざい」「むかつく」と暴言を吐いていました。幼児であった時の妹と弟は、そんな私を見ても言葉遣いを真似することはなかったです。しかし、小学校に進学し、成長するとともに言葉遣いが悪くなりました。私は、自分の行

いや言葉遣いが妹や弟に悪い影響を与えていたと思い、反省しました。幼児は、身近にいる人の影響を受けて、育ちます。環境はとても大切です。幼児を育てる幼稚園は、良い環境をつくり、教育をします。私は、学習と経験を通して、幼稚園の先生も幼児にとって大切な役割をし、責任ある仕事だと知りました。

幼稚園の先生は、資格をとる必要があり、簡単につける職業ではありません。また、楽しいことだけが起こるとは限りません。私が、今後将来に向かっていく中で、つらいことがたくさんあるかもしれません。私は、つらいことがあると、すぐ後ろ向きになってしまいます。だからこそ、私は、幼稚園で味わった気持ちを大切にしていきたいです。園児達のように、何事にも好奇心を持って、一生懸命に行動すれば、良い結果につながると思います。私を導いてくれた先生のように、私もまた園児達を将来へ導いてあげたいです。そして、子供を教育するという責任をもって行動できる先生になりたいです。



見えない仕事と感謝の気持ち

東京都立大泉高等学校付属中学校 二年

田 辺 凜

世の中には見える仕事と、見えない仕事がある。見える仕事というのは、華やかでかっこいいという印象があり、人のおのずと感謝するような仕事である。例えば、テレビなどで取り上げられたり、ドラマの主役になってりする、スポーツ選手や、警察官、消防士、弁護士、医者などである。僕も幼いころ、電車の運転士になりたいと思っていた。電車を運転するという人の目につく部分だけを見て、かっこいいと思っていたのだ。一方で、見えない仕事というのは、地味、人が気が付きにくいような仕事である。イメージとしては、華やかさとは無縁な、どちらかというと少しさびしい仕事だ。だから、これまで僕は、あまり気にとめたことはなかったのだ。感謝するという気持ちもうまれなかった。しかし、職業体験を通して、多くの考えは大きく変わった。

僕は、職業体験で図書館の職員の仕事を体験した。僕がこの職業体験で学んだことは二つある。

一つめは、仕事には、利用者から見える仕事のほかに、利用者には決して見えない仕事があるということである。僕が図書館で担当した仕事の中に、本を修理するという仕事があった。この仕事は、本からはずれかけたページを接着剤や

テープで直したり、利用者がページに書いて、消し忘れてしまった文字や線を消したりするという、とても地味な作業で、言われなければ気が付くことはなく、根気がある仕事だった。僕は日頃から、よく図書館を利用しているが、いつもきれいな状態で本を借りることができるのは、こういう見えない仕事のおかげであり、そんな仕事こそ実は尊いということ、この時はじめて知ることができた。

二つめは、あたり前のことでも、それをあたり前だと思わず感謝の言葉を言おうと、言われた側は、とてもうれしいということだ。僕がカウンターで、貸出と返却の仕事をしていた時である。利用者が、貸出と返却の作業を終わらせた僕に、「ありがとう」と声をかけてくれた。僕は一瞬おどろいたが、すぐにうれしい気持ちでいっぱいになった。相手にとっては、何気ない感謝の言葉だったかもしれないが、その言葉が、言われている側にとっては、とてもうれしいということを知ることができた。そして、益々、この仕事をがんばろうという気持ちになった。このことから、ぼくは、感謝の気持ちを言葉で伝えることの大切さを「ありがとう」と言葉をかけられて、改めて実感した。

職場体験を経て、今、ぼくが強く感じているのは次のことである。

まず始めに見える仕事だけではなく、見えていない仕事もあり、その仕事も大切だということだ。職業体験の後、幼いころにあこがれていた電車の運転士のことを調べてみた。ただ運転する姿がかっこいいと思っていた運転士も、実は免許を取得した後も訓練を受け続けているとわかった。将来、僕

はまだ何の仕事につくかわからない。しかし、どんな仕事についても見える仕事だけではなく、見えない仕事もしっかりやろうと思った。

それから、感謝の気持ちを言葉で伝えることだ。実際に僕自身、「ありがとう」という言葉で、うれしいという気持ちやがんばろうという気持ちがわいた。僕のまわりには、僕のために仕事をしてくれ、そして、僕を支えてくれる人がたくさんいる。まずは、一番近くで僕を支えている両親に、感謝の気持ちを言葉で伝えたい。

「ありがとう」と。



高等学校の部 最優秀賞

遠回りした道の先

東京都立墨田工業高等学校 三年

桂 栄光

私は高校で学ぶようになる前に少し遠回りをしました。中学校の時、勉強に対してあまり興味を持てなかった私は、このまま高校に進学しても意味が無いと思い、好きだったものづくりの道へ進むために職業訓練校に通うことにしたのです。

職業訓練校の機械実習の時、先生から自分の取り組む作業について、「どうしてそういう作業をするのか疑問に思うことがないのか、なぜその理由を考えないのか？」と、声を掛けられました。この時の私は図面通りに品物ができていればそれでよいと思い、先生の言葉の意味を深く考えませんでした。

その後、機械加工の会社に就職した私は、職業訓練校で学んだことができれば仕事も大丈夫と高をくくっていました。しかし実際には、図面通りに作るだけではうまくいかなかった。ある日、材料の鋳物を加工する作業を終えて上司の所へ持って行くと元の材料に「巣」と呼ばれる無数に空いた小さな穴が大量にあったことがわかりました。欠陥のある材料をいくら加工しても製品にはなりません。その欠陥を自分で見付けられなかったのがとても悔しかったのを覚えています。

年数を重ねていくうちに一通りの仕事も覚え、会社の人たちからも認められるようになりましたが、それにつれて要求される仕事の難易度は高くなっていききました。それまでは感覚だけで仕事をしてきましたが、それでは難しくなった仕事に対応することができなくなり、ふと心に「なぜできないのだろうか」という疑問が浮かんできました。「なぜうまく加工できないのか」、「なぜ欠陥がでるのか」など疑問が次々と湧いてきました。この時、職業訓練校の先生に言われた言葉を思い出し、やっとその意味が分かったような気がしました。一步上のレベルで仕事をするためには、ただやみくもにするだけではだめで、しっかりとした理論の裏付けを知ることがぜひ必要だと感じ、「高校で勉強したい。もっと学びたい」と強く思うようになりました。

現在、私は工業高校の定時制、機械コースで学んでいます。授業では、例えば、教室で実習前に数式を使って主軸の回転数を求めたり、どのようにすれば効率よく作業ができるかといった理論を学習します。その後、工場の実習し、毎回必ずそ



高等学校の部 最優秀賞 桂 栄光さん

の日の内容を振り返り、成功の手応えや失敗の反省、感想などをレポートに具体的に記述してまとめます。そして、実習で身をもって経験したことを教室に持ち帰り、次回の実習へ向けて作業工程の見直しをします。このように授業は、教室の座学で理論を学び、それを工場の実習で実践し、レポートにまとめて振り返る、という二つのステップの繰り返しです。ただ作品を作るだけでなく、どのように作るのか、どうしてその作業をするのか、ということを経験し、教室と工場を往復して身に付けるのです。

今までの実習で一番印象に残っているものとして、鑄造実習があります。この実習では鑄物を作る一連の作業に取り組みます。砂型を作り、できた型に熱く溶かした金属を流し込んで作るのです。初めてやってみると砂型が崩れたり、溶かした金属を型に流し込んでもうまく型全体に広がらずにいびつになったり、失敗続きでした。しかしそこで、土に含まれる水分量や、金属が溶ける温度などの理論を学ぶことによって、次の実習では作品を完成させることができました。

作品は、理論と実践の両方が合わさることで初めて形になっていきます。座学と実習を繰り返す高校の授業の中で、理論と実践の経験を積み重ねていった先にあるのが、本当の意味での「技術」なのだと思えることができました。

また、このように実際に自分で鑄物を作ってみることでその大変さがよく分かるようになり、人の作ったものを見る眼も変わってきました。以前とは違い、会社で加工する材料の鑄物の「巣」もよく見付けることができるようになってきました。失敗しないための着眼点や、逆に失敗しやすい所も、

自分で作ってみることで分かるようになってきたからです。

高校の実習で取り組む課題は、他にも、旋盤、溶接、手仕上げなど多岐にわたります。幅広く、さまざまなものづくりを経験することで、いろいろなことが分かるようになってくると、今までは頭の中でモヤモヤしてばらばらだったものが、まるでジグソーパズルを組み立てるように繋がって、今まで見えていなかった物事の全体像が少しずつ見えてくるようになってきた気がします。周囲が変わって見えるほどの確かな変化を自分の中に感じるようになりました。

いつの間にか、勉強は私にとって苦手なものではなく、「知る」という楽しみに変化していました。ジグソーパズルを完成させるためにもっと勉強して知識を増やし、自分の知恵に変えてゆく、その重要さに気がつくことができるようになりました。少し遠回りしたけれど、いや、だからこそ、高校は自分を成長させてくれる意味のあるものになりました。

そうした変化の中で将来目指していきたいと思うものができてきました。それは、かつての私のように勉強が苦手な嫌いだっただけの人にも「知る」楽しさを実感させてあげられるような教員になりたい、ということですね。勉強はもちろんですが、自分の知識や経験を活かして考えること、この大事な「知る」ことや発見すること、人は変わることができる、というのを伝えられる、そんな先生をぜひ目指していきたいです。



高等学校の部 優秀賞

私の転換点

東京都立田無工業高等学校 三年

松 永 拓 也

「吃音症」という病気があります。言葉が円滑に出ず、うまく話すことができない症状で、ある言葉を連続して発声してしまう「連声型」や、最初の発声から後が続かない「無声型」など、様々な症状があります。思うように話せないことに起因する対人恐怖症やうつ病などの二次症状が出ることもあり、人によってその程度も様々です。自分の名前が言えない、挨拶ができない、電話がかけられないなど、社会生活全般に大きな影響を及ぼします。

私はこの吃音症を患っているため、たった一言の挨拶にも苦勞するほど、喋ることに對して苦手意識を持っています。とっさの一言、特に人と出会った時の挨拶が出ず、会釈しかできないことがあります。また、授業で音読をする時にも症状が出たりします。そのため、人前では話したくない、どうしてうまく話せないのだろう、と悩み苦しんできました。こういったことが将来、自分だけでなく周りの人にも迷惑をかけたか、不快感を与えたりするのではないかと、このまま就職活動の時期を迎えたら、面接で喋るなんてできるわけがない、などと強い不安を感じていました。工業高校に入学した後も

症状が良くなる気配はなく、気がかりが焦る毎日を送っていたのですが、ある転機が訪れました。

それは、高校一年の終わりに参加したインターンシップです。インターンシップとは、関心のある業種・職種について、数日間の就業体験を行い、企業や社会人についての理解を深めることを目的とする取組です。その後には「長期就業訓練」と呼ばれる、時間をかけて企業と直接マッチングを図る就職活動にもつながります。私はこの説明を聞いた時、これに参加すれば私の持つ吃音症という不利を打ち消せるのではないかと、つまり、就職に有利になるのではないかと、思ったのです。あまり褒められた理由ではないかもしれませんが、自分の将来が不安だった私は、このような思いからインターンシップへの挑戦を決意しました。

当然のことながら、体験に至るまでにはいくつもの壁を乗り越えなければいけません。最初の壁は、事前の電話です。吃音の症状が特に酷くなるのが電話の時、受話器をとり言葉を発しようとしても言葉が詰まってしまい、いたずら電話と間違えられてしまったこともあります。そのため、事前に受け入れ先の企業に電話をかけなければいけないというだけで、私にとっては大きなプレッシャーでした。

当日は、念入りに自分を落ち着かせてから電話番号を押しました。電話はすぐにつながり、学校の名前と自分の名前を口から絞り出したところまではよかったのですが、その直後に言葉が詰まってしまいました。「あの、その、えっと……」会話にならない音しか出ない状態に陥ったのです。

結局、見かねた担当の先生の「……代わろうか？」という言

葉に頷いて、受話器を渡しました。やってしまった、と焦り、泣きたい気持ちになりましたが、参加すると決めた以上、もう逃げ道はないと覚悟を決め、数日後、受け入れ先である都心のホテルに向かいました。

指定されていた場所に着き、受付の方に挨拶に来たことを何とか伝え、事務室に案内されました。緊張しながらも「お世話になります。」と一言挨拶をすると、相手の課長さんと案内の方が笑顔で、「学校の先生から聞いていたより酷くないね。」と言ってくれました。どうやら、私のことを心配した進路指導の先生から、あらかじめ担当の方に伝わっていたようで、事務室にいらっしゃった他の方々も、私の抱える課題を含めて職場に迎え入れてくださいました。

仕事内容は、ホテルの設備管理でした。建築科で勉強しているとはいえ何も分からない私は、社員の方に同行し、荷物や道具を運びました。現場で社員の方が空調フィルターの点検や水道の配管清掃などをされる様子を見学しながら、できる作業は手伝って、一日目の体験が終わりました。

体験期間中、印象に残っている会話があります。一つの休憩時間だったかは記憶が曖昧なのですが、思いきって課長さんに、吃音症に関する自分の悩みを相談してみたのです。

すると、「吃音は君の個性なんだよ。」という言葉返してくださいました。その時の私は、「ああ、そういう考え方があるのか。」とそれまで思いもしなかったことが、人から言われて初めて自分の胸にすんと落ちたような気がしました。

合計三日間のインターンシップを経験して、分かったことがあります。それは、吃音症を抱えていても、他の人と同じ

ように働くことができるということ、そして、私が思っている以上に私は周りの人たちに受け入れてもらっているということです。

このように振り返ると、私にとって高校生活が大きな転換点になっていると感じます。

ずっと以前から吃音に悩んでいたために、身につけた技術を活かした就職を考えて工業高校を選んだこと、そのような私の「個性」や思いを先生方や友人たちが理解してくれたこと、そして、工業高校に入ったことによってインターンシップに参加し、自分の課題に正面から向き合えたこと。これらの経験を通して、私は関わった多くの人たちに受け入れてもらえているという実感を得ることができました。

また、徐々にはありますが、症状が改善されてきていることも感じます。今後も、インターンシップに挑戦しようという決心した時の勇気を忘れずに、自分の抱える課題に向き合って前に進んで行こうと思います。

拡がれ「福祉の心」

東京都立津野田高等学校 二年

藤野実咲

皆さんは、自分が高齢者になった時、人生の最後をどう過ごしたいですか。私は、自分の近い将来すら想像したことが



ありませんでした。そんな私は、都立野津田高校福祉科に在籍し、将来の夢である介護福祉士を目指し、日々の勉強や実習に励んでいます。

私が、介護福祉士という仕事に出会ったのは中学校の社会の授業でした。そこで、少子高齢化が現在の日本の社会問題であること、特に高齢者福祉施設で働く介護士が不足していることを知りました。人の役に立つ仕事に就きたいと思っていた私は、この授業をきっかけに漠然と、介護福祉士になることを考えるようになりました。私が中学二年生の時、その漠然とした夢を明確にする出来事がありました。それは、特別養護老人ホームでの職場体験で介護福祉士の方が話してくださったことです。

「特別養護老人ホームに入所して下さっている利用者様のほとんどは、本当は家族と過ごしたいけれど、それができないから仕方なく施設に入所しているのです。そんな寂しい気持ちをもって入所された方を最期に看取るのは、私たち職員という赤の他人です。しかし、赤の他人でも、ここで最期を過ごせてよかったと納得してもらえるようにサービスを提

供するのが私たちの仕事です。また、利用者様がお亡くなりになられた後、ご家族に『有難うございました。眠っているけれどすごくいい顔をしています。』と感謝されたときに私は、仕事のやりがいを感じます。」という言葉を聞き、この仕事は人が“死”を迎えるま

でその人にとっての人生をよりよいものにする事ができるかという、人が生きる事と死ぬ事という人生そのものにかかわる尊い仕事であると気づかされ、胸を打たれました。

皆さんが「介護」と聞いて一番に思い浮かぶことはきっと、「きつい・汚い・安い」といったマイナスイメージではないでしょうか。しかし、私は介護実習を通して対人援助職の一番大切なことに気づくことができました。

私は、今年の夏休みに、二か所の高齢者福祉施設で介護実習をさせていただきました。施設の形態は、通所介護と通所リハビリテーションで、どちらも日帰りでご利用していただくものです。異なったサービスを提供している二つの高齢者福祉施設ですが、共通して言えることは、利用者様が施設での生活を積極的に楽しく行っていたことです。私も、利用者様とお話をする機会があったため、一人の女性の利用者様に「何を楽しみに来られているのですか。」と尋ねたところ、「全部よ。」とおっしゃられました。この一言に介護のすべてが集約されているのではないかと思いました。近年、福祉施設において職員が利用者様を虐待、殺害するなど利用者様の人権や命も守られていない残念なニュースが取り上げられています。確かに、マイナスイメージを持つ人もいます。ですが、それは介護のほんの一部分でしかありません。利用者様の多くが、施設で楽しく充実した時間を過ごされているのです。

九年後の二〇二五年には、一般的に高齢者と言われる六十五歳以上の人口が三六五七万人に達するといわれ、これは、国民の二・五人に一人が六十五歳以上、四人に一人が

七十五歳以上ということです。その後も高齢者の人口は、増加を続け、二〇四二年には、三八七八万人でピークを迎える」と推計されています。このような時代、社会の中で、介護職は非常に重要な位置づけにあると言えます。

そのことを踏まえて、私の目標とする介護福祉士の姿は、どんなに大変でも介護福祉士としての本質を見失わず、利用者様と関わる全ての場面で尊厳を守り、その人らしい生活を送っていただけるよう、利用者様の心に寄り添った介護を提供できる介護福祉士です。中には、やむを得ず望まない入所となってしまう方もいらっしゃいます。そんな方にこそ、「入所してよかった。」と思っていただきたいです。通所介護を利用されている利用者様にも、施設で過ごされる時間のすべてを楽しくより質の高い生活を送っていただけるよう、一日一日を大切に關わっていいこうと思います。また、介護職という仕事の尊さを多くの人に知っていただき、超高齢社会を支える人が増えることを願っています。

今私たちが当たり前に過ごしているのは、人生の先輩方の苦勞があったおかげです。“ありがとう”という字は、漢字で表すと“有ることが難しい”と書きます。当たり前のことを当たり前と思わず、毎日同じ生活が送れることに“ありがとう”の感謝の気持ちをもつことが高齢者への優しさにつながると考えています。

私自身が、感謝の気持ちと優しさを持ち続け、介護の職に就くことはもちろんですが、将来、介護福祉士となる後輩や身近な友達、家族、社会のみんなにもそんな優しさを持ち続けてもらえるよう、介護福祉士としての本質や利用者様を思

う気持ち、そして「福祉の心」をより多くの人に伝えていきます。

『御馳走様』を『頂きます』

東京都立瑞穂農芸高等学校 二年

尾 嶋 亜 水

あなたは今朝、食べたごはんにきちんと手を合わせて「頂きます」、「御馳走様でした」と言ってきただろうか。この突然の質問に、ドキっとした人もいるかもしれない。

私は、農業高校で1年以上、畜産について学んでいる。その為ほぼ毎日、多くの動物達と關わってきた。1年生の時には、自らヒナから育てたニワトリを解体し、食べるという実習も経験した。非常に切ない気持ちであったが、大切にしてきた命だからこそ無駄のないように解体した。その味は、今まで食べた鶏肉の中で一番美味しく、家族から大好評だった。私は身を持って「頂きます」、「御馳走様でした」という感謝の言葉の重みを理解したのだった。

最近、ある悩みが出てきた。母が文化祭で販売される豚汁を食べたくないと言うのだ。

私は現在、養豚類型に所属している。そこでは一人1〜2頭の豚を担当する事ができる。発情チェックから交配、分娩介助まで、全て自分達の手で行われる。私の担当は、「わらび」

という耳の垂れた愛嬌たっぷりの豚だ。私はすっかり彼女の虜である。

わらびを担当する事が決まってから間もなく、分娩介助を体験した。彼女にとって、記念すべき初産である。分娩は、予定日より三日くらい遅れる事が多いのだが、なんとわらびは一日前に産んでしまった。驚くのはここからだ。わらびは初産にも関わらず、死産なしに十三頭をスムーズにあっという間に産んだ。なんて優秀な子だろう。しかし、そんな優秀なわらびでも、十二番目に産んだ仔豚は未熟で、生まれた瞬間は鳴いてはくれなかった。先生は私に慌てた様子で「タオルでいっばいさすって!」と指示した。私は必死になってタオルでその仔豚をさすった。「頑張れ、頑張れ」と呼びかけながら。この際、自分の腕なども良いと思った。その甲斐あってか、その仔豚は元気に鳴いてくれた。私は「命ってこんなにキラキラしてたんだ!」と感動した。その後も、その仔豚も含めた十三頭はすくすくと元気に成長してくれた。

このようなわらびに関係する話は、必ず家族に報告している。その為、母まですっかりわらびの虜になってしまった。最近、わらびの初産の仔豚の肉が文化祭の豚汁になる事がきまった。私はいつものように家族に報告すると、母に「絶対食べれない!」と言われてしまった。私だって、日に日にその仔豚達への愛情が強くなっていくが故に、食べなくてはならないというのは辛い。彼らの事が愛おしくてたまらない。そんな彼らを食べようという私は鬼だろうか。そう思われても良い。私は最後の最後まで彼らの命と誠意をもって向き合いたいのだ。むしろ、豚汁のお肉に選ばれてくれてラッキー

だと思う。普通ならここで生まれた仔豚達は肥育業者の元へと出荷されてしまうからだ。

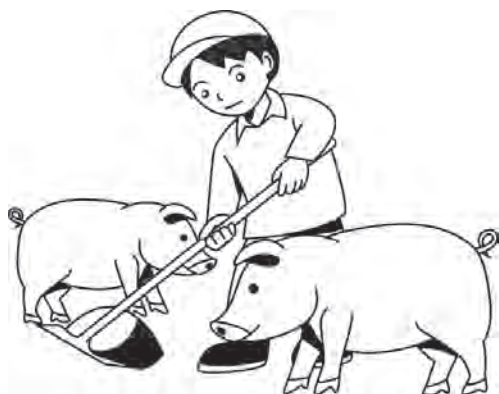
私は、生きる事は他の命を背負っている事なのだと考えている。わらびの仔豚の豚汁が食べられないと言った母も、その事を頭では分かっているのだろう。そんな母にも私と共にわらびの仔豚の命を背負って欲しいのだ。自分の体の一部となってもらい、共に生きていきたい。それが毎日頂いている「御馳走様」との向き合い方なのではないだろうか。

母以外に、この事を分かって欲しい人達がいる。以前私達は、校外学習で食肉市場を訪れた。そこには産業動物がお肉になるまでなどの工程が分かりやすく展示されているブースもあった。その展示物の中にある葉書があったのだが、その内容は食肉市場で働く人を非難する凄まじいものだった。そんな事を言う人がいるなんて、私はこの葉書を読んでショックで仕方が無かった。この葉書を書いた人達に、こう問いたい。あなた方はこれまで何を食べて生きてきたというのだ。野菜だろうと魚だろうと、食肉市場で解体される動物と同じ命を頂いてきたのではないか。でなくてはあなた方は、そんな風に元気にペンを握り、葉書など出してはいないだろう。

私は、もっと多くの人に自分の体が沢山の命からつくられている事を理解してもらおうべきだと思う。動物だからどうか、野菜だから、とどうこう言うのは間違いである。どんな命も私達の「御馳走様」となって生かしてくれているのだ。命に差は存在しない。だから私達にはその恩を返すという義務がある。自分の体となってくれた命の分、感謝の気持ちを忘れずに沢山生きなくてはならない。

この事を理解してもらおう為にどうしたら良いのだろう。そう考えた時、「いのちの授業」というものを思いついた。それは、畜産を学ぶ私達が、中高生を対象に授業をするというものである。授業では、実際の私たちのニワトリを育ててから食べるまでの流れのVTRを包み隠さず見せる。加えて、「頂きます」、「御馳走様でした」の言葉の重みを私達の口から説明する。同世代の私達だから、届く言葉があるのではないだろうか。ニワトリの解体の映像を包み隠さず見せるというのは、ショックが強いかもしれない。しかし、そこまでしなくては消費者の無理解は問題視されたままになってしまふ。そう考えると、全くやり過ぎた事ではないのだ。

このように、生きる為の産業を学ぶ私には、学んだ事を伝えていく使命がある。みなさんにはどうか、これから「御馳走様」達に手を合わせ、毎日を大切に生きていって欲しい。あなたの命は、あなた一人だけのものではないのだから。



高等学校の部 佳作

将来の夢

愛国高等学校 二年

浅見 汐里

私の夢は助産師になることです。私は、この夢を小学校低学年の頃から持っていました。この夢を絶対に叶えたいと思ったのは中学二年生のときです。中学二年生では、二日間の職業体験がありました。私はもともと助産師になりたかった。そこで、産婦人科を希望したかったのですが、行きたいところを選ぶプリントには当然、産婦人科はありませんでした。しかし、私は諦めることが出来ず、先生に相談し近くの産婦人科クリニックに頼んで頂きました。そして、私は自分の夢に一番近い産婦人科で体験ができることになりました。待ちに待った体験初日、看護師さんに案内されてとても可愛い赤ちゃん達が眠っている新生児室に入ると、看護師さんに早速「赤ちゃん抱っこしてみよう？」と言われ、抱っこをさせて頂きました。体験前日に院長先生とお話した時に「赤ちゃんを抱っこするのは危険なので、主に見学になると思います。」と言われていたので、とても嬉しかった反面、驚いたのを覚えています。その他にも、実際に褥婦さんとお話したり、分娩時に使うガーゼを折ったり、助産師さんとお話を聞かせて頂いたりしてこの日は終わりました。そして二日目、この日

に経験したことこそが絶対に夢を叶えたいと思ったきっかけとなりました。私がお昼休憩をしていると、「産気づいた妊婦さんがいるからすぐに来て。」と言われ、何が何だかわからず看護師さんについていきました。すでにお産は始まっていて分娩室はまるでドラマのような光景でした。痛いと言いつつながら一生懸命力んでいるお母さんと生まれてこようと頑張っている赤ちゃんを見て、本当に感動し、自然と涙があふれしました。また、両親は私のことをこのように命がけで産んでくれたのだと思い、感謝の気持ちで胸がいっぱいになりました。そして数時間後、無事に赤ちゃんが生まれた時、分娩室全体が笑顔で包み込まれ、赤ちゃんの力はすごいなと感じました。二日間本当に貴重な経験をさせて頂き、夢への道を一步進むことができたのだなと感じ、とても嬉しく思いました。

そして、このように夢への道を一步ずつ歩んでいるとき、私の前に大きな壁が立ちました。それは高校受験です。小学生の頃からずっと「助産師になりたい」「愛国高校の衛生看護科に入りたい」と口では言っていたものの、勉強量が足りず、成績も一向に伸びませんでした。このままではまずいと思い始めたのは中学生最後の定期テストの時です。「このテストで良い結果を出せないと進路を変えなくてはいいけないよ」そう周囲の人達に何度も言われました。一時は進路をかえるべきなのかなと思ったこともありましたが、私はやはり「看護科に行きたい」そう強く思いました。それから私は、周囲の人達に「人が変わったようだね」と言われる程の変わりようでした。一回終わるのがやっとだったワーク

は五回以上やり、テストの日まで自分の出来る限りの力を出し切りました。努力は実り、点数も順位も驚くほどあがりました。「為せば成る」ということわざにもあるように、その気になって頑張れば、できないことはないのだと感じました。そして、今の私があるのは両親や祖父母、塾の先生、学校の先生方の支えがあったからです。特に両親は、私の受験前、勉強しやすい環境を作ってくれたり、寒い日には温かいスープやココアを作ってくれたりたくさん協力してくれました。とても感謝しています。

今、看護学生である私は悔しい思いをしたことが何度かあります。私がいつも通り乗り換えの電車を待っていると、時間になっても電車が来ませんでした。やっときた電車に乗ろうとするものすごい勢いで駅員さん達が入ってきました。優先席に座っていたおばあさんが怪我をしたようで、その駅で救護するのに、一度車椅子に座らせようとしていました。しかし、五人くらいの駅員さんでもなかなか乗乗させることができず、十分くらい経ってようやく乗乗できました。そのとき、私はただ見ているだけで何も出来ませんでした。頭の中では「看護学生です、お手伝いします」その言葉が浮かんでいるのに、体が動きませんでした。それは「逆に邪魔になっています。もうどうしよう」そういう思いがあったからだと思います。そのおばあさんが降りてからも「どうして私はあんなに簡単なことが言えなかったのだろう」と、とても後悔しました。ある人にこのことを話すと、「後悔しているその気持ちが大切だよ。その気持ちを持って次こういうことがあったときは頑張ればいいじゃない」と言われました。このこと

があったから、「もっと勉強して胸を張って看護学生ですと言えるようにしたい」そう思うようになりました。これから先、戴帽式の筆記試験、戴帽式、患者様を初めて受け持たせて頂く病院実習、半年間の病院実習、准看護師試験とたくさん大変なことがあります。それらを乗り越えていく中でもし「やめたい」などと思ったときには、様々な人たちが私を支えてくれているということ、絶対に助産師になりたいという気持ちを忘れずに、一步一步着実に夢への道を歩んでいきたいと思っています。

調理師になるために

愛国高等学校 三年

遠 藤 祐 香

私が調理師を目指したきっかけは沢山ありますが、その中でも祖母の影響は非常に大きいと思います。

母方の祖父は持病を持っているので、私に食事療法の知識があれば支えることができるのではないかと考え、卒業と同時に調理師の免許を取得できる愛国高校への進学を決めたのです。

高校に入学してから、お盆の時期には必ず岩手県の祖父の家に行き、健康に良い献立を心掛け食事を作っています。私は祖父のために朝四時半に起き、夜中の0時半に寝るとい

生活をしていました。これは自分の手際の悪さが関係していると思うのですが、そんな様子を心配したのか、祖父にこんなことを言われました。

「自分の体を一番に考えなさい。調理師が体調を崩したらそこで終わり。料理も出せないし、健康に良い食事です、と言っても信用されないでしょう。」

確かにそうだなと思いました。次回は行く前にきちんとレシピを考えるなど準備をして、作業のスピードも速くできるように努力しようと思っています。

父方の祖母は栄養士の免許を持っていて、私が小さい頃から料理を教えてくれていました。包丁の使い方も一から全て教わりました。祖母の家に行くと、毎回「卒業制作」並みの料理が出てきていつも勉強になっています。「卒業制作」とは、私たち家政科の生徒が三年の卒業前に三年間学んだことの集大成として作り、発表する作品のことです。それぐらい凝った料理を作って見せてくれるのでとても参考になります。

私が料理の道に進みたいと話した時も、一番最初に応援してくれたのは祖母でした。私が手助けするから、出来るだけサポートするから、とずっと言い続けてくれました。愛国高校を紹介してくれたのも祖母でした。祖母の家は、愛国高校と同じ江戸川区にあり、

「学校の教育方針もいいし、行事も沢山あるし、好きなダンスも調理師になるための勉強もできるから、貴女に合っているのでは？」

と勧められ学園説明会に行きました。そして、私も本当に良い学校だと感じ、受験することを決めたのです。今こうして



料理を残す人も少なく、だからこそ、もっと食べてほしいという気持ちから、残った食材で夜食のおやつを作ることになりました。スィカシャーベットやスイカの皮を

てくれた後輩に、とても感謝しています。

調理師を目指して勉強できるのも祖母のおかげと感謝しています。私は入学してから一度も後悔したことはありません。本当に入学して良かったと思っています。高校一年生の時からずっと、祖母の家に行っては実技のテストの練習や勉強を見てもらっています。ずっと教えてくれている祖母のためにも、沢山勉強して技術を向上させ、立派な調理師になりたいと思っています。

この夏休みに、学校の臨海寮に現場実習へ行きました。朝から約百人分の食事を作り大変でしたが、大変という気持ち以上に美味しく作って沢山食べてもらいたい気持ちがあっ

て、辛いと思うことは一度もありませんでした。また、自分の所属しているダンス部の合宿もそこで行われていたもので、休憩の時に練習の様子を見に行くことができました。その時に後輩に食事の感想を聞くことができました。量は適当か。

味は美味しいか。料理の温度は適温か。すると、料理の温度が少し冷めている時があるとの指摘がありました。確かに盛り付ける時間が早い時がありました。そこで、盛り付けの時間を少し遅らせるようにしました。そうすることによって丁度よい温かさで提供することができました。遠慮せずに教えて

器にして作ったフルーツポンチ、練乳から作った生キャラメル、マシュマロケーキ、バナナケーキ、ブドウゼリーなどです。作っている時も楽しかったのですが、一番楽しかったのは、どんどん夜食が減っていき、「美味しかった」と喜んで

いる姿を見る時でした。

普段の集団調理の実習とは作る側の人数も作る量も全然違いましたが、実習のメンバーと力を合わせて三泊四日の最終日まで失敗なく終わることが出来て本当に嬉しく、達成感を得ることができました。この経験を活かして、これからの集団調理の授業も更に頑張りたいと思います。

現在、私は調理師の免許を取得するための勉強をしています。卒業後は短期大学に進学し栄養士の免許も取得したいと考えています。そして静岡にあるホテルに就職するというのが、実現したい夢です。このホテルは熱海にあり、年に三回訪れるほど祖父のお気に入り宿で、私も一緒に何度も宿泊しています。今しかできない沢山のことを勉強して経験を積み、それらを活かして人の役に立てるように頑張ります。一つ一つの実習の授業や講習会を大切にして、調理師を目指すきっかけをくれた祖父母、支えてくれる方々への感謝の気持ち忘れずに、日々精進していききたいと思っています。

学んできたこと

愛国高等学校 三年

菅 野 紗 矢

私は高校進学にあたり、色々な学校を見学し、自分の進路について真剣に考えました。その時、現在通っている愛国高校の学園説明会の中で商業科の先輩が自分の学科についてスピーチをしている姿を見て、「商業科」に興味を持ち、憧れの気持ちを抱きました。

念願叶って入学した私は一年生の時、簿記という教科に出会いました。私達の学校は一年生の時には普通科、商業科同一カリキュラムで二年生になる時に普通科か商業科か選択することが出来ます。一年生の時に全商簿記検定三級を取得することができた私は、簿記に惹かれ、二年生になる時に商業科の会計コースに進学しました。

商業科会計コースに進学してから、「生徒銀行」で銀行業務を行うようになりました。「生徒銀行」は三井住友銀行を親銀行とし、生徒が学内において貯金をする事ができるというものです。歴史は古く、現在では最も長く続いている「生徒銀行」だそうです。実際にお金を扱うので責任とやりがいを感じることのできる作業です。初めは間違ったりすることもありました。今はスムーズに作業することができて、遅れている人を手伝うこともできるようになりました。そうした中でコミュ

ニケーションの大切さを実感しています。銀行業務で友達と協力しながら学ぶ中で団結力も深まってきました。

授業では、簿記が専門教科になり授業数も増え、内容も難しくなっていくので焦ってしまったり、内容を理解できない自分にイライラしたりもしました。しかし、自分が選んだ道なので、めげずに検定資格の取得に向けて勉強に取り組みしました。

三年生になり、全商簿記検定一級を取得することができました。検定前の補習では合格点に達せず、苦手な部分を何度も何度も勉強しました。やはり、努力というのは大切なものと改めて思いました。先生は検定の勉強だけでなく、社会に出た時にためになることも教えてくださいます。このように色々なことを学ぶことができるのは、自分の力だけではなく、教えてくださる先生や、わからないところを教え合うクラスの友達がいるからだと思っています。特にクラスの友達とは、このような検定や授業などを通して団結力が強まり、行事に力が入り、スポーツ大会ではバレーボールで優勝することができ、クラスのもとまりを感じました。

また、最上級生になり、生徒会である学友会の副会長として学校行事の運営に携わるようになったことにより、更に多くのことを学ぶ機会が得られました。私は社会奉仕の担当です。中学生の時に東日本大震災の被災地である中学校との交流から被災地の現状を知り、ボランティアや奉仕活動に積極的に関わりたいたいという思いがありました。高校でもエコキャップ運動や赤い羽根共同募金、夏休みには「希望の家」という施設でのお手伝いなどに参加してきました。また、学友会では学校の「親切基金」から被災地宛ての寄付金をお届けするという活動

もしています。私はそういう活動を通して、周囲のことに目を向けて自分の今できることをやっていくことの大切さを改めて感じています。これからも学友会の活動に積極的に取り組んでいきたいと思っています。

ある日、学園説明会でスピーチをしてほしいというお話をいただいた時には驚きました。なぜなら三年前、スピーチをする先輩方の姿に憧れを持っていた私が今度はスピーチをする立場になるうとしていたからです。スピーチの内容を考えた時は、たくさん伝えたいことがあってまとめることが難しかったです。通学中の電車の中や家で何回も練習しました。当日の本番前にも繰り返し練習しましたが、緊張のあまり、言葉が詰まってしまったところがありました。しかし、本番では伝えたいことがはっきり言えたので、ほっとしました。大勢の人々の前で、自分の意見や話を聞いてもらうという良い経験をさせていたのだなと思いました。スピーチの後には商業科を希望している中学生を案内する係として仕事をさせていただきました。説明をしながら三年前の自分を思い出して懐かしくなりました。今、私が先輩の立場にいるということが不思議に感じられました。改めて自分自身の成長を実感することができました。

今後は商業科の三年生として、日商簿記検定二級の取得を目指し勉強していきたいと思っています。また、生徒銀行での作業を正確に速くできるようにしたいと思います。今は商業科で得られる資格を沢山取得することが目標ですが、将来の夢は看護師になることです。奉仕活動やボランティア活動を通してその思いは更に強いものとなりました。高校卒業後は看護師になるための勉強をするために進学したいと考えています。高校生

活の中で得たものは、私の人生に必要なものであり、ためになるものばかりだと思っています。これまで経験したことを踏まえて、自立した女性へと一歩ずつ成長していきたいと思っています。

将来の夢

愛国高等学校 三年

高山アミイ 由璃奈

私の夢は「食」に携わる仕事に就くことです。小さい頃から食えることが大好きで料理を作ることも大好きだったので調理師の資格を取るために愛国高校の家政科に入学しました。そして上級学校である愛国学園短期大学に進学し、栄養士の資格を取得することが私の目標であり、将来の夢に繋がっています。また、短大では栄養教諭の資格も取れるので、取得できる全ての資格を活かして、将来は学校給食の現場に就職したいと考えています。

家政科に入学してから調理実習の授業では一年生の時に日本料理、二年生の時に中国料理・エスニック料理を学びました。日本料理は基本的なお皿の位置や盛り方、包丁の使い方、出汁の取り方など料理の基本を学びました。また日本ならではの郷土料理はとても印象深いものでした。中国料理では日本料理のような種類の多い包丁ではなく、刃の大きく重い中華包丁を使用しました。和食とは違った大胆な料理方法、油を

主に使った料理、野菜を美しく見せる飾り切り、中華料理ならではのスピード料理を身につけることが出来ました。現在高校三年生となって、西洋料理を学んでいます。西洋料理では、一からブイヨンを作り、レストランで見るような肉の焼き加減や盛り付け方など、見た目でも楽しめるような料理方法を学びました。さらに三年生となって、これまで学んだことを活かし集団調理の実習を行っています。実習では約百人分の食事を作ります。調理器具も全て大きく、また指を切断してしまう恐れがあるなど危険が伴うことを授業で間の当たりにして実感しました。この集団調理の実習を通し、これまでの調理実習とはまた違った、私の夢に結びつく学びが沢山できることに気がつきました。例えば、給食の献立には、アレルギー表示をする特定材料名を書かなくてはいけないということです。アレルギーを持つている方は献立の表示を見て食事を選択することもあるそうです。私は今までの考え方を変えなければいけないと思いました。また、扱う食材にも細心の注意を払わなければならないということです。食品の検品には、発注書を確認しながら数量と状態を確かめる必要があります。また調理の際も、焼き物では中心温度を計る必要があります。先生から半熟卵は学校給食では提供できないと聞きました。何故かと尋ねると、不十分な加熱では腐りやすく食中毒を起こす危険性が高まるからということでした。改めて、小中学校の先生方がいかに給食を美味しく安全に提供してくださっていたのかを実感し、感謝の気持ちを感じました。そして食品を取り扱う際は、汚染区域と清潔区域をしっかり区別する必要があるということです。実習中、私は清潔区域

で野菜を切ろうとして先生方にご注意を受けました。たったそれだけのことで何故なのかと思いましたが、そのような事の積み重ねが食中毒などに繋がるのだと反省し、より気をつけるようになりました。また配膳をするためにも不備のないように整えるなど、集団調理の実習を通して学校給食に対する実践的な心構えが身につけられていると感じます。

私が将来学校給食に携わることが出来たら、地域の特産や旬のものにこだわった献立作りを心掛けたいと考えています。また好き嫌いをなくすような、目で見ても楽しい献立を考えたいと思います。実際中学生の時に、栄養士の先生の授業を受ける機会がありました。先生は絵やパネルを使って分かりやすく教えてくださり、私達の目線に立って明るく話しかけてくださいました。その授業や姿を通して、栄養士という職業に興味が湧いたのです。

調理師免許取得を目指して入学した家政科の授業を学ぶにつれて、夢へ一歩ずつですが前進出来ているように感じています。一生懸命に作った料理を美味しかった、また食べたいと言ってもらえることが、どんなことよりも嬉しいか実感しました。作っている立場の人が一番喜ぶ素敵な言葉だと思います。私もその言葉を沢山言って頂けるようになりたいと思います。そして、私の夢のきっかけとなった栄養士の先生のようになりたいです。まだまだ身につけなければいけないことも多くありますが、沢山の経験を経て絶対に夢を叶えたいと思っています。

憧れの存在

愛国高等学校 三年

中 野 希 都

看護師になることを目標に、高校の衛生看護科に進学した私は、早いものでもう三年生になりました。五月末から成人看護実習が始まり、夏休み明けからはいよいよⅢクル目に入ります。私の憧れの存在となる看護師さんに出会ったのは、Ⅰクル目の循環器科の実習でした。

その看護師さん（以下N看護師さん）は、もしも自分がその患者様だったら……と置き換えて考えながら患者様と向き合う、素敵な看護師さんでした。また、看護実習生である私たちに対してとても熱心に指導とサポートをしてくださいました。私はその姿に尊敬の思いを抱きました。

循環器科での実習内容はむずかしいものでした。私の受け持たせていただいた患者様はターミナル期（「死にいたるまでの期間が限られている」ということを考慮する必要がある状況）の患者様でした。患者様は、全身倦怠感が日に日に増していき、ついには、学生の提供する看護ケアには協力を得られなくなりました。N看護師さんは看護師歴が長く、そういった状況の患者様にも適切な看護の提供を行える方でしたので、私はその様子を見学させていただくことになりました。

私の受け持たせていただいた患者様は呼吸苦の出現もあり、それに伴い入浴は医師より湯船には浸からないシャワーのみの指示となっていました。しかし、その方は以前より「湯船に浸かりたい」という発言が頻繁にありました。看護には「QOL」というものがあります。「クオリティ・オブ・ライフ」の略称であり、「生活（生命）の質」のことを指す言葉です。それは患者様の満足感にも直結するものです。入浴という、本来であれば日々の生活行為にあたるものが制限されてしまっている患者様にとって、湯船に入りたいけど入れないというのは、清潔行為として満足に欠けるものです。しかし、病気の進行度や入浴による疲労感を考えると、シャワーのみとなるのもやむを得ません。でも、一方で、ターミナル期は患者様の望むものを尊重し、可能な限り求む看護を提供する、という考えもあります。だからでしょう。病棟で指定されている入浴日の前日、N看護師さんは明日の一日の行動計画を立てる参考として、その患者様を湯船に入れる予定であることを教えてくださいました。翌日、私はその見学に入らせていただいたのです。

入浴担当の看護師はN看護師さんでした。機械浴の浴室は自立度の低い患者様が介助されながら入浴するため、車椅子やストレッチャーが入るスペースを考慮して広く設計されています。また、一つの浴室に二名の患者様が入るため、裸になるという羞恥心に配慮し、患者様同士が異性の場合にはカーテンで仕切りを作るようになっています。その日は、浴室に既に同性の患者様が入られていました。本来であればカーテンの仕切りは必要ではありません。しか



し、N看護師さんはカーテンを閉めるように、他の入浴担当の看護師に伝えました。私はその時、「あれ、同性の患者様なのに。」と思いました。ですが、その直後、N看護師さんはぼそっと、「私だったら同性でも嫌だなあ。」とおっしゃいました。そして私もその言

葉を受け、自然と納得しました。なぜなら、私は未だに温泉に行くのに抵抗があるからです。だから、自然にそのことと同じだと思ったのです。また、これは私の憶測ですが、患者様にとってせっかくの入浴の機会を、なるべく他の患者様やスタッフとの接触を最小限にすることで満足のいく入浴になるようにしたいとの考え、N看護師さんの思いやりからの行動ではないでしょうか。私は患者様の気持ちに寄り添った援助や看護を行うN看護師さんの姿に心を打たれました。まさに私の理想とする看護師の姿でした。

その後数日してからその患者様は、強く望んでいた帰宅、退院となりました。つまり、N看護師さんが介助に入ったあの入浴が、入院中では最後の入浴となったのです。全身倦怠感から望んでいた入浴さえも拒否する言動がありましたが、湯船に入られた際に見せた気持ちよさそうな表情を私は忘れられません。

夏休みが明けると、残す病院実習Ⅲクール目が始まります。新しい環境に行くということは、そこでの患者様や看

護師さんとのまた新たな出会いがあることを意味します。もちろん、新しい環境に足を踏み入れることは緊張します。ですが、新たな出会いや環境から学ぶことがたくさんあると期待します。臨床の現場では、学びの数に限りはありません。なぜなら、患者様の人数だけ看護には違いがあるからです。私はいろいろな「新しい」に積極的にいかわり、たくさん刺激を受けて、たくさん学びを得たいと考えています。そして、新たに尊敬する存在を見つけては自分の目標にし、さらなる自己の向上を目指して、今後も看護の道を全うしていきたいと思っています。

戴帽式を終え実習へ

愛国高等学校 三年

嶺 島 千 明

私は、高校二年生の十一月、晴れて戴帽式を迎えることができました。戴帽式は看護学生にとって特別なもので、一生に一度しか経験することのできない大切な一日となりました。戴帽式は通過点でもあり、出発点でもあります。戴帽式を迎えることができたのも、たくさんの方々が支えてくださったからこそだと改めて感じ、感謝の気持ちで一杯になりました。

その次の日から、いよいよ二週間にわたる一クールの基

礎実習が始まりました。実習を行わせていただいた病棟は内科病棟でした。ご高齢の方が多く、日常生活においても援助を必要とすることが多いという点が患者様の特徴でした。一週目は看護師の一日の動きを知ることが第一とされ、看護師の後ろについて行動する「シャドーイング」をさせていただいたり、指導者さんからご指導いただいたりしました。指導者さんから質問されることがたびたびあったのですが、自分の学習不足でその場では答えられないことがほとんどでした。しかし、質問されたことをすぐにメモをし、家に帰ってから思い出して事後学習に取り組むことで、より深い知識を自分のものとすることができました。受け持たせていただく患者様が決まったのは一クールが終了する四日前でした。さっそく、受け持ちの患者様のところへ行き、挨拶をしました。緊張しながら、

「来週の火曜日から受け持たせていただく嶺島千明です。よろしく願います。」

と挨拶すると、患者様は笑顔で、

「はい、こちらこそ願います。」

と言ってくれました。患者様のために何かできることはないだろうかと考えました。初めての实習でできることが限られているため、まずは患者様のことを知ろうと思いい、カルテを見て情報収集を行ったり患者様とコミュニケーションを取らせていただきました。コミュニケーションは誰にでもできる簡単なものだと思いますが、そうではありませんでした。言葉遣いや表情、患者様と目線を合わせることなどを意識しましたが、充分にできたという実

感はなく、コミュニケーションはこの実習で残った課題の一つです。

初めて患者様の血圧測定をさせていただいた時は、正確に測定できるのだろうかと緊張と不安で手が震えてしまうほどでした。学内演習はたくさんしましたが、患者様の腕は細く、脈拍のふれ方が弱いので、クラスメートを相手に行うのとはやはり違うものだと感じました。一クール最終日、二回目の血圧測定では、一回目の時より聴き取ることができたので少し成長できたと嬉しく思いました。八日間にわたって行われた一クール目の実習最終日であるこの日の申し送りで、受け持ちの患者様が退院されることでした。受け持たせていただいた期間は四日間と短かったのですが、私にとって初めての患者様であり看護学生である私のことを快く受け入れてくださった方の退院を嬉しく思いました。

二クール目は、療養病棟で実習させていただきました。私が受け持たせていただいた患者様はご高齢で自立度は低く、コミュニケーションをあまり取ることができない方でした。二クール目の目標は、清潔ケアを行うことでした。清潔ケアは、援助計画というものを書き、指導者さんからの許可が出ないと行うことができません。指導者さんや先生に相談し、修正を加えながら援助計画を仕上げていきました。この援助計画は、実習で苦労した一つでもありました。清潔ケアでは、陰部洗浄やおむつ交換、全身清拭や寝衣交換などを行わせていただきました。実際にやってみると、作業スペースが狭く思うように動けなかったり、援助計画

通りに進まず焦ってしまったりとスムーズにいきませんでした。ケアを行っている時も身体に痛みがあったり、不満に思うことが多々あったと思うのですが、実施後には、「ご苦労さん、ありがとうね。」

と、私に伝わるようにと一生懸命おっしゃってくださいました。その一言で胸がいっぱいになりました。患者様の状態、患者様が抱えている問題を踏まえて看護に活かすことが「個別性のある看護」に繋がると学びました。「個別性のある看護」は、教科書通りにいかないことがほとんどです。患者様の立場になって考え物事を見なければいけないことはとても難しいことです。「個別性のある看護」を提供するには、もっと看護の勉強をしなければならぬと感じました。

現在は、成人看護実習二クールが終了し、基礎看護実習の時よりできることが増え、要求されることも多くなってきました。自分の学習不足でたくさんのご指導をいただき、挫折しそうになることも度々ありましたが、共に頑張っている友人と励まし合いながらここまでくることができました。

長く感じられた前半の実習も、こうして振り返ってみるとあつという間に終わったように思います。振り返ることで気付くこともありました。また、看護師の仕事を間近で見学、実習させていただいたことで、自分が理想とする看護師像がより明確なものになっていきました。私が理想とする「患者様の抱えている思いや不安などにも耳を傾けられ、誰からも信頼される看護師」に少しでも近づけるように、基礎看護実習、成人看護実習二クールで学んだことを大切にして、これから始まる成人看護実習三クールなどに活か

していききたいと思います。

インターンシップが 私に教えた養殖の面白さ

東京都立大島海洋国際高等学校 三年

藤 田 能 徳

私は現在、海洋高校に通っており養殖業に興味を持っている。養殖業に興味を持ち始めたのは高校一年生の時で、テレビでマグロ養殖のドキュメントを見たときに自分もやってみたいと軽い気持ちで思ったのが一番初めのきっかけである。私は高校で学ぶ中で養殖についてさらに興味が増し、実際に体験してみたいと考え先生に相談した。その結果うまく話が付き、奄美大島にある奄美養魚でインターンシップが行えることになった。高校三年生の春休み、奄美大島に行き約一週間のインターンシップを経験した。

初日の朝、集合時間が早いため普段よりも早く起床した。仕事場につき、時間になるとラジオ体操が流れ社員全員でラジオ体操をする。やはり現場では体を使う作業が多いのでこのラジオ体操は欠かせないものだと感じた。それから安全祈願を行う。養殖だけに限らないが、現場での作業は当然危険が伴う。このような安全祈願も一人一人が安全に仕事を行うという意識を持つためには必要なことであることを改めて感じた。毎日朝はこのような一連の流れで進む。



まず私が体験させていただいた作業は「稚マダイの選別」という作業だ。これはスロープのようなもので流れてくる稚マダイを一匹ずつ人間の目で確認し、異常がないかを調べる作業である。何十万匹という莫大な数の稚マダイを扱うため、集中力のいるとても神経の使う大変な作業だった。成長が遅れていて基準サイズに達していない稚マダイは育て直すために専用の生け簀へ送られる。また、目がないものや体の表面に傷があるもの、口が曲がっていたり背骨が収縮したりしたいわゆる奇形というものは親魚になっても状態が変わることはなく出荷することができないためその段階で廃棄されてしまう。私はこの廃棄されてしまう稚マダイの数が想像以上に多かったことに驚きを感じた。そして、この奇形を減らすことができればより効率的に養殖することが可能になると感じた。次に行った作業は「マリンサワー」と呼ばれるもので、魚を病気や寄生虫から守るために魚を薬の入った水で泳がせることで予防する目的で行われるものである。私が体験した対象の魚はカンパチで二週間に一回の頻度で行っているそうだ。この作業は網を持ち上げたり、ロープをきつく縛ったりする稚マダイの選別とは対照的にとても力が必要になってくる。また、この作業は危険も伴う。まず、かなり濃度の高い薬品を扱うため人間が触れないように十分に注意を払わなければならない。また、

薬浴は短くても効き目が薄かったり、逆に長くても魚にストレスを与えてしまうため時間の管理が重要であり、スムーズな作業が求められる。そのため十数人が生け簀の周りをすばやく移動する。その中で私は一度足を踏み外し海に下半身が落ちてしまったことがあった。今回は軽いけがで済んだが、過去にはかなりの大けがをした人もいるほど危険な作業だった。最後は「マグロの出荷」を見学した。この作業は難しいため体験することはできなかったが、見るだけでもとてもない迫力だった。マグロを陸に釣り上げ、血を抜き、えらや内臓を取り除き、体を洗い、氷につける。この作業を分担して行い、一分程で終わらせる。この速さが鮮度を良くし、おいしいマグロを提供するためには欠かせないものであると改めて感じた。

私がインターンシップを通して痛感したことは仕事の相手が「生き物」であることの大変さである。人の都合、ペースで仕事はできないため、魚が卵を産めば普段は寝ている時間であろうと出勤しなければならないという。また、天気が悪いからと言って作業を行わないと魚はすぐに死んでしまう。全ては魚の都合なのである。そこがとても面白い部分であり、とても難しい部分であると私は思った。また、養殖を学ぶにあたって養殖の知識だけではいけないことも知った。例えば、天気についての知識だ。天気は魚に影響する。そのため天気について知っていないと予測することや対応することが難しくなってしまう。ほかに船や潜水のことについてだ。養殖の現場では生け簀が沖にあるため小型船舶の免許を持っていないと一人で行くことができない

い。また生け簀内の網や魚の確認をするには潜水士の免許が必要である。私はこれらのように養殖業の大変な部分だけでなく大きなやりがいを感じることができた。育成した魚を出荷した時の喜びはとても大きいものだった。そして私はこの養殖という分野で働きたいと考えるようになり、大学へ進学し、養殖について深く学びたいと思った。そして将来的には現在養殖されていない魚種の養殖を成功させるような養殖の分野の発展に大きく関わるような仕事をしたい。

学校での勉強とアルバイト

東京都立小金井工業高等学校 二年

橋 本 昂 季

私は、小金井工業高等学校の受験に際し、母から、アルバイトをし午前中何もせずに寝て過ごすことがないようにという条件を提示されました。それは当時の私にとってどうしても受け入れる気にならない条件でした。なぜなら、私は体力に自信が無い上、あきやすい性格だと自覚していたからです。それでも、最終的に私は、母からの条件を受け入れ、入学の二ヶ月後、父の紹介で、水道管の保温工事のアルバイトを始めることになりました。

そのときの私は、「水道管の保温工事」と言われても、何

をすればいいのか見当もつきませんでした。水道管の保温工事というのは、アパートやマンションなどの集合住宅内の水道管の保温カバーを、取り付けたり、取り替えたりする工事の事です。この保温カバーがないと、水道管が汗をかき、周囲の機器を故障させたり、床に水が滴り、思わぬ事故を起こしたりする可能性があります。そのため、水道管の保温工事は、集合住宅にとって、必要不可欠な事です。

仕事の現場は、毎回のようによります。初めての現場は、自宅から一時間以上もかかる場所でした。私は、これまで一人で電車に乗って遠出したことがなかったため、遅刻をしてしまいました。現場に着くと、先輩から、初めての現場だから、一度目の遅刻は目をつぶるので今後遅刻をしないようにと言われました。このことがきっかけで、私は二度と遅刻することがないようアルバイトの前日までに現場までの行き方を何度も下調べするようになりました。また、交通機関の乱れが生じて大丈夫なように、当日の朝は、時間に余裕をもち、早朝4時には起床して早めに現場に向かうようになりました。元々朝が苦手な私にとって、定時制高校に通いながら、毎朝4時に起床することは、とても辛いことでした。また、水道管の保温工事の仕事は、覚えることがたくさんあります。持ってくる道具や、使用する材料の名前、そして現場によって変わる作業員の方々の名前を覚える必要があります。勉強が嫌いで、暗記が苦手な私にとって、面倒だと思ふ事もありました。それでも、私は、保温工事のアルバイトを辞めようとは思いませんでした。水道管の保温工事は、私にとって魅力あふれる仕事であり、

とても楽しく、やりがいを感じていたからです。先輩の話では、スカイツリーの建設の際にも、水道管の保温工事が行われたそうです。私が毎日のように携わっている仕事の先が、そのような大きな社会貢献につながっていると思うと、ますます仕事に対するやる気が出てきました。

私はこれまで、本気で何かを成し遂げようとした事がありませんでした。それにもかかわらず、今私は、アルバイトと学校生活を両立させています。現場が遠く、疲れた日でも、学校を欠席したり、遅刻したりしたことは一度もありません。学校生活においても、生徒会役員に立候補して当選しました。そして、小金井工業高等学校が「より良い学校」、「楽しい学校」になるよう、日々貢献しています。

アルバイト先では、勉強の必要性を痛感しています。アルバイトの給料や交通費は、手渡しで支給されます。その際、その場で金額に間違いがないか確認しなければなりません。暗算で各現場に要した交通費を計算したり、現場への所要時間を計算したりしなければなりません。暗算が苦手ということで済ませていれば不利になることがあると痛感しました。

小金井工業高等学校で学んだことが現場で役に立ったこともありました。水道管は、真っ直ぐではないものが多く、これを正確に採寸した後に保温カバーを取り付けなくてはなりません。このとき、私は電気工事の実習で学んだ、電気コードの長さを正確に測り、裁断するノウハウを思い出しました。この経験が、水道管の採寸や、保温カバーの裁断に役に立ちました。

私は小金井工業高等学校で勉強に励みつつ、水道管の保

温工事の技術を高めていきたいと思っています。そして、卒業後は、日本を陰で支える水道管の保温工事を生涯続けていきたいと思っています。

食の洋風化と日本食離れ

東京都立農芸高等学校 三年

佐藤 美朝

Good morning. What did you eat this morning? I heard that recently people prefer bread over rice for breakfast. 今日の朝ごはんは何を食べましたか。米よりパンを食べている人の方が多いのではないのでしょうか。二〇一五年の調査では男女共に、ご飯類よりもパン類を食べる人の方が多いという結果が出ています。二〇一三年十二月に和食がユネスコ無形文化遺産に登録され、海外からの注目を集めています。登録されたことは嬉しいですが残念なことに現在、日本人の日本食離れが進んでいます。

私は幼稚園から小学校三年生までイタリアで生活していました。現地ではピザ一枚を一人で食べきるのが基本であったり、ハムやチーズなどを多く食べました。学校の給食ではパスタやマッシュポテトなどで生のサラダやフルーツが出ることはあまりありませんでした。スープも出ることはなく、メニューもほとんど変わることはありませんで



した。今年の四月には、私はアメリカへ行きました。ハンバーガーとポテト、ステーキとパンといったように、パンや肉がメインで量も多く味も濃かったため、私一人では食べきることは出来ないと感じました。その様な中で寿司屋などの日本食レストランを目にし、非常に賑わっている様子が印象的でした。

なぜ海外では、日本食が人気なのでしょう。和食の献立の基本的なスタイルである一汁三菜に人気の理由があると考えられます。和食は食物繊維やタンパク質を摂りながら食欲を満たすことができます。また肉が比較的少なく、豆腐や納豆などの大豆製品が主菜になることが多いため、脂肪分が低く、洋食に比べてヘルシーであるということも魅力の一つです。このように和食には多くの利点があるにも関わらず、なぜ日本人の日本食離れが起きているのでしょうか。現在、海外から様々な食べ物が入り、米からパン、魚から肉、卵や牛乳といった動物性のタンパク質をとる食の洋風化に原因があります。またコンビニエンスストアやファーストフード店、インスタント食品の様に簡単に安く食べられる物が増えました。そのためにそれらに比べて調理などに手間のかかる和食は、だんだんと日本人の食生活から離れていったのだと思います。

健康面から見た食の洋風化は、悪いことの方が多い様に考えられます。和食に比べて脂質の摂取量が多くなり、日本人には少なかった心臓病や大腸ガンを増やすことになりました。また乳ガンの増加も食の洋風化に伴う体格やホルモン環境の向上に原因があると考えられています。近年、日本人の血液濃度が高くなっていると言われており、この状態が長い間続くと、血管の狭窄や梗塞などを招くことになります。洋食は高カロリー、高脂肪を摂りやすいだけではなく、コレステロール値や中性脂肪、血糖値などを上昇させます。これらは生活習慣病の原因にもなります。

和食は世界からも注目されており、健康にも良いにも関わらず、日本人の日本食離れは悲しい現実です。私たちは和食を継承するために何ができるのでしょうか。私は学校の授業で野菜をつくる機会がありました。作った野菜を使い、味噌汁やおひたし、天ぷらなどをつくり、食べました。自分で作ったものや地元で生産されたものを使い、受け継いできた味を次世代を担う立場の人にも知ってもらうために家族単位、地域単位で和食を食べる機会を増やし、「和食」というものに興味をもつことが必要です。農業と食は切っても切れない関係にあり、農業に対する理解と関心を深める必要があると思います。私たちは農業を学んでいるのでその知識を活かし、和食を発信していけると思います。また4年後には日本でオリンピック、パラリンピックが行われます。これを機に多くの人が日本に訪れることになるので、国内だけではなく、海外の人々に向けて「和食」を発信していくことも必要だと思います。私は海外渡航経験や

実用英語技能二級の知識を活かして、英語で海外の方々に和食の素晴らしさや伝統について積極的に発信していきます。みなさんもこの素晴らしい食文化について、当事者意識をもって深く考え、日本の伝統を継承してきませんか。

Let's return to Japanese food. Thank you for your listening.

私達がやらなければならぬこと

東京都立農産高等学校 一年

佐藤綾乃

ある朝、ニュースを見ていると衝撃的なニュースが流れました。「日本の食料自給率、三十九パーセントまで落ち込む。」そのニュースを聞いて私は自分の目の前にある朝食がひょっとしたら食べられなくなるかと感じたのです。そのため、私は日本は危機的な状態にあるのではないかと思いました。つまり、日本人が食べている食料の中で約6割が海外からの輸入品なのです。私は五十パーセントを下回っていることは危険だと直感しました。

日本は、オーストラリア、アメリカや中国などから多くの食料を輸入しています。輸入できるのはこれらの国々と良い関係を保っているからです。しかし、もしその関係が壊れてしまったら、輸入できなくなります。また、最近、

世界各地でこれまでに、観測されたことのないような異常気象が起こっており、これらの国々でも今までのように農作物を生産できなくなってきています。その時、日本は自分たちが生き残れる量の食料を確保することができなくなります。これらのことを考えても、今、日本の食料生産力を向上させることが大切だと思います。

それでは、私には何ができるのだろうと考えました。そして、出した答えが農家になることでした。私は小さい頃から農家になりたいという夢を持っていました。私の祖母の家は福島県で野菜農家を営んでおり、トマトやキュウリなどを生産しています。私が物心つく前から年に一度くらいですが訪れて、小学生の時は収穫をして袋詰めなどの手伝いをしました。その時、私は農家の方が大変な苦勞をして農作物を育てていることを知りました。しかし、採れたての野菜をその場で丸かじりするとみずみずしく、都会のスーパーで買ったものとは全く別の味がしました。その頃から私は農家になりたいという夢を持つようになりました。

農家というのは地味で泥臭いというイメージを持っている人が多数いると思います。しかし、もし、農業をする人が少なくなってしまうたら、私たちの食料がなくなってしまうです。農家という職があるからこそ私たちは食べているのだと思います。そして、私は中学校で自分の進路先について考えたときに、農業について専門的に学ぶことができる農産高校を選びました。

農産高校では園芸デザイン科に所属しており、農業の基礎的な知識、技術のほかに、農家の経営に必要なことも、

身につけたいと思います。

そして、まだわかりませんが、祖母の家をついで野菜農家になりたいと思います。祖母の家は、いわゆる準主業農家ですが、農業の収益が生活の大部分を支えています。私はまだ野菜に関する知識や技術がほとんどなく、これから勉強していかなければなりません。つまり、新規就農することとはほぼ同じなのです。新規就農とは全く農業に携わったことがない人が農家になることをいいます。確かに厳しい世界ではありますが、私は自分の夢を実現させるために努力を惜しまず、頑張っていきます。

そのためにまず私は農業を学ぶことのできる大学に入りたいと思います。農産高校で学んだことを活かして、さらに農業に関する高度な知識、技術を身につけたいと思います。そして、大学卒業後、祖母以外の農家で研修をして、認定農業者という資格を取りたいと思います。認定農業者とは市町村の農業委員会から農家としてやっていけるだけの力があると認められた者に与えられる資格です。この資格がないと農地を購入することができないのです。私は祖母の直接的な後継者でないため、祖母の持っている農地を購入する可能性があります。そのためにも様々な農家で研修を積んで、認定農業者になることで祖母の家を継ぎたいと思います。

そして、祖母が行っていた野菜の栽培はもちろんのこと、新たにお茶の葉の栽培をしてみたいと思います。私は生の抹茶を食べたことがあるのですが、そのあまりのおいしさに将来、こんなにおいしいお茶を自分で栽培してみたいと

思いました。祖母の家は福島県の山沿いにあり、年間を通じて気温が低いためお茶の栽培にも向いています。祖母の話を良く聞きながら、私なりの農園を作り上げていきたいと思っています。

農業は作業はきついし、儲からないからやらないという人もいますが、日本の食料供給を支える大切な職業です。私は農家として自分の栽培した野菜やお茶を通じて、みんなを笑顔で元気にしたいと思っています。そして、農業って楽しいと胸を張っていえるようになります。



対人援助職のプロになる

東京都立野津田高等学校 二年

小川 紗奈

私の将来の夢は看護師です。曾祖母が入院している時、安心できる状態でなく不安で少しでも一緒にいたいと思っていました。その時、「私たちがいるから安心してね」と声をかけてくれた看護師がおり、私はその言葉に嬉しくなりました。患者様にもその家族にも安心してもらえて心や身体に寄り添えるような看護師になりたいと思うようになったことが看護師を志したきっかけです。

看護師という職業について知るために、病院での看護体験に何度か参加し、医療現場での看護師の仕事を間近で見学して体験をしました。実際の現場を見ると、私が想像していた看護師とは少し違う所があるということがわかりました。それまでは、診察の補助や治療などを行っていたと思っていましたが、その他にも看護師の業務があると思いました。

私は現在、福祉科のある高校に在籍しています。看護と介護で領域は違いますが、少し似ている部分があると思います。介護に興味を持ち入学しました。福祉科の介護実習では、利用者様との関わり方や介護技術など様々なことを学びます。利用者様との関わりではただ話すだけではなく、その

利用者様の趣味や生活歴など、利用者様のことを理解できるようにコミュニケーションを取ると知りました。介護技術では、利用者様全員に同じ介助をするのではなく一人ひとりに合わせた介助を行っていると思いました。私が実習を通して気づいたことは、ただサポートをするだけでなく利用者様一人ひとりを理解してその人に合わせた介助やサービスを提供するということです。

私は、看護体験と介護実習を通していくつかの共通点があることに気づきました。その中でも、特に共通していることは二つあります。一つめは、介護技術です。看護でも介護でも、車いすの介助や体位変換、食事・排泄の介助を行っていました。介護職が行っているというイメージが強い介助ですが、看護師の仕事にも含まれていました。一つめは、患者様や利用者様といったそれぞれの領域の対象者に対する理解です。対象とする全員が同じ症状や状態ではないので、一人ひとりの状態を理解し、それに合った治療・介助・サポートを行っていました。他にも、カルテや介護記録など元からある情報だけでなく対象となる人との関わりの中からも情報収集していました。利用者様・患者様と関わることは、対象者を理解するだけでなく、信頼関係を築くためにも必要なことでした。対象者との信頼関係は、関わっていく中でどちらの領域にも必要なことだと思います。入院している患者様は、慣れない入院生活に不安を持っていて、施設の利用者様は、今まで出来ていたことが出来なくなり不安になっている方がいるかもしれません。そういった時、信頼できる支援者がいるだけで心の支えになると思

います。

看護と介護の共通点をまとめると、看護はただ治療をする、介護はただ介助をすることではなく、どちらの領域も対象者のことを理解し、治療や介助につなげていくことがわかります。このことを生かしていくと、その人の心と身体・日常生活に寄り添うことができると思います。しかし、寄り添うだけではなく、理解する中で見えてくる生活上の課題の解決に向けて科学的に考え、実践していくことも共通する大切なことだと考えます。

私は、高校で介護の勉強をしています。高校では、対人援助職として基本なことや、介護実習・授業を通して介護職に必要なことを学んでいます。高校卒業後は、看護についての専門的なことを学ぶために進学しようと考えています。看護と介護の専門性は、全く別のものです。しかし、日常生活のサポートや対象者の理解など共通する部分があります。この共通点は、看護師を目指しながらも介護を学ぶ私だからこそ気づけたことだと思います。私はそれぞれの専門知識を身に付けた上で、看護と介護両方の視点を持ち、その人らしい生活をサポートし患者様・利用者様に安心してもらえる対人援助職になりたいです。これから、専門分野についての理解を深め、患者様の気持ちに寄り添っていただける看護のプロフェッショナルを目指します。

「ありがとう」のありがたさ

東京都立野津田高等学校 二年

丹野利玖

私の将来の目標は介護福祉士として特別養護老人ホームで働いて利用者を支援することです。理由は中学二年生の時、職場体験でデイサービスセンターに行きました。そこでたくさんの高齢者の方と話をしました。車いすを押したり、お茶出しをして福祉現場は大変だけど、やりがいを感じました。そこから高齢者の地域での生活を支援されるところで働きたいという思いが強くなり、都立野津田高校福祉科に進学しました。

福祉科では福祉制度やコミュニケーションに関する知識、介護技術を学び国家資格である介護福祉士の資格取得を目指しています。その中でも介護実習では様々な福祉施設において多くの利用者の方と関わってきました。介護実習は体験から現場を知り考察を行い、そこから新たな自己の課題や福祉・介護の課題を発見するという重要な学習です。今年の夏休みに障害者施設で六日間の実習を行いました。その施設では学校で学んだ以外にも様々な障害のある利用者がいらっしゃいました。介護実習ではどのように支援をしたら、利用者のためになるのか考えながら行いました。最初は多くの方とお話したり、レクリエーションを一緒に

やったりして一人一人の思いや心身機能を理解しようとした。しかしその人にあった支援をできなかったり、一つの介助に時間がかかってしまい利用者の方を不快にさせてしまいました。私の考えていたその人に合った支援とは程遠いものになっていました。利用者の方と毎日コミュニケーションをとっていくと、少しずつ一人一人に合った介助や気遣い、声掛けなどができるようになっていきました。私が担当することが多かった利用者の方は、右半身が麻痺しており動かすことが難しく、お茶出しの際はコップの取っ手を左側になるように置く工夫をしたり、車いすで移動する際には、左半身が動くという残存機能を活かして車いすのブレーキを自分で外していただくなど、その人に合った支援を心がけるようにしました。そうすると次第に利用者のほうから「ありがとう」を言われるようになってきました。

介護は余計なお世話や、ずれた支援を行ってもそれは利用者の自立を促したり、生活の質を高める支援とは言えません。そのため利用者の方の思いやニーズ、心身状態を理解し一人一人にあった支援を行うことが利用者の生活の質を上げるために重要であることを理解できました。

私の目標である特別養護老人ホームは心身の理解だけでなく、利用者の今までの生活や生きてきた歴史にも着目して支援をしていく必要があります。なぜなら利用者にとって施設が「生活の場」だからです。入所される高齢者の方は一人一人、生活リズムや生活様式は違います。そのため一人一人の考え方や生きてきた歴史を理解し、その人に合った個別ケアを行うことが大切だと思います。

しかし、最近のニュースや新聞でも取り上げられているように介護施設で虐待や事件がおきてしまい利用者の生活が大切にされていない現状があります。それによって介護に対して否定的な考えをもつ人も少なくありません。例えば賃金が他の職種に比べて低いことや重労働な仕事であると言われていることも原因の一つです。確かにそういう否定的なイメージも多いかもしれませんが、私は「介護は素晴らしい仕事だ」と感じています。高齢者の今までの経験や生活を大切にし、高齢者の今を理解して、これからの人生を幸せに暮らしてもらうための、その人に合った支援を提供していくことが介護職の面白さだと考えています。

これまでに利用者の方に言われた「ありがとう」は何物にも変えられない達成感がありました。この「ありがとう」は私自身が、利用者へのより良い支援を考えようとするきっかけになっています。この言葉が自分自身を介護の専門職に繋げていくものであると考えています。私は介護の良さを大切にして、社会に広めていき、介護の悪いイメージを少しずつ無くしていきたいです。これが今の私にできる福祉への貢献だと考えています。その人に合った支援ができたときに利用者の方から言われる「ありがとう」は利用者も私自身も幸せにしてくれる魔法の言葉だと思っています。



介護職として社会を創る

東京都立野津田高等学校 二年

福嶋 香穂

「虐待・人材不足」は介護現場だけではなく、大きな社会問題となっている。なぜ虐待が起きるのか？それは多くは介護者のストレスによるものだと言われている。また、そのストレスの要因は過労や多忙感によるものが多いのではないかと思う。

私はこの夏、介護実習でその現実を目の当たりにした。高齢者施設での実習で体験したことであるが、職員の方は介護者より何倍以上の人数である利用者様を支援するため、毎日とても忙しそうだった。そんな中、認知症の症状が見られる利用者様が何かを訴えていた。声が大きく周りの利用者様が少し離れるようにしていたため、私はその方に声をかけた。「どうしましたか？」と聞くと「私ね、一番に帰るの？何番なの？」と聞かれたので「今日、〇〇さんは一番だと思いますよ」と正しい答えを言ったものの、答えを知らなかったはずの利用者様は納得がいかなかったようでその後、何分も同じ会話が続いた。そうしていると職員の方に呼ばれたため行くと、「あの方は認知症で普通に会話をしているでもコロナと話の内容が変わっちゃったり、同じことを繰り返し聞いたりするのは症状の一つだから」とい

うお話があった。それから私は一日の中で、何度もその利用者様に声をかけられるためその度にしっかりとお話を聞くようにしていたが、職員の方に「他の利用者さんともお話した方がいいから、いいよ」と言われてしまった。日に声をかけられることが多くなっていたが答えることができず、いつからかこれは利用者様にとって心理的な虐待にあたるのではないかと思うようになった。学校で、講師の方を招いて認知症サポーターの講義を受けた際、認知症の方とのコミュニケーション方法として「しっかりと相手の話を聞く」という項目があった。私はそこで学んだことを意識して、その利用者様が発している言葉には何かしらの意味があるのではないかと思い、利用者様に寄り添って話を聞きたかったが、この実習中にはやりきることが出来ずに、利用者様の不満そうな顔が印象深く残ってしまった。介護現場において、利用者様の声や思いを受け止めることが出来ない現状があることが分かった。

また、障害者施設では言語でのコミュニケーションを取ることが難しい方が多くいるが介護者が利用者様の理解をし、それを支援につなげていく事で、利用者様や利用者様のご家族のニーズにお応えすることができないのではないかと思う。しかし、介護士も人間であるためコミュニケーションがうまく取れずにストレスを感じることはあると思う。虐待による尊厳を脅かすような行為をすることで、利用者様との信頼関係を失うことになる。そのため虐待は防がなければならぬ。周囲の人たちの一声で支援は大きく変化すると考える。『介護サービスを利用するすべての人たちの

権利擁護は介護職にはできない』とみなされてしまうのではないかと思った。個人が人間としての尊厳をもって生きていくことを様々な場面でサポートしていかなくてはならないのに、人権を脅かすような問題点が上がってはいらないと思う。

虐待が起きるもう一つの理由として、「介護職の人材不足」が大きく関係しているのではないかと思う。厚生労働省が2025年に介護職員が約38万人不足し、「介護難民」が今以上に増加することが予想されている。現在も介護人材の不足により、施設の受け入れが制限され、すでに介護を必要とする人がサービスを利用できないような状況になってしまっている。

日本の未来が見えない今、私は介護福祉士になることを目指して学習をしている。介護を必要とする方に自分が望む、その人らしい生活をしてもらうためにも、信頼関係を築いていくことが大切だと思う。私たちは、介護の理念である「自立支援」と「尊厳の保持」に基づいて、利用者様の心身に寄り添った支援をしていかななくてはならない。確かに介護職は仕事の量や内容と比較して低賃金であるという課題があり、介護職への就職を希望する方が少なく、離職する方もいる。しかし、目の前にいる利用者様やご家族一人ひとりと向き合い支援していく介護の仕事はとても素晴らしい仕事だと思う。私はさらに介護を志す人が増えるように、介護福祉士という仕事の魅力を多くの人に伝えていきたい。高齢者も障害者も地域の中で安心して暮らせる社会を創るのは私たちである。

専修学校の部 優秀賞

私の職業観

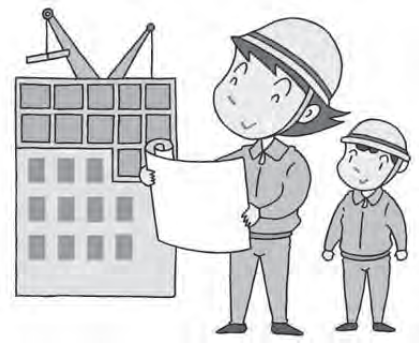
青山製図専門学校 一年

門馬 英人

私の将来の目標は、一級建築士として働くことである。建築士として、活動していく上で、心掛けていきたいことがある。それは、施主の思いを自分の設計に重ね、施工者に思いを実現させることである。

初めに、私が建築士を目指す理由は、実際に社会人として働く中でモノ作りをしたいと思ったからだ。モノ作りの中でも、建築を選んだのは、家業が工務店を営んでおり、自分のアイデンティティを感じたからだ。建築士を目指すきっかけとなった言葉は家業を継いだ兄から聞いた。その言葉とは「大工はゼロから最後まで仕上げることに喜びを感じる。」この言葉がこれからの仕事を決めるきっかけになった。もちろん、大工ではないが、設計自体がゼロから作り、完成まで見届けることが仕事であるからこそ自分もやりたいと思った。

今回の夏休みを利用して、実家の手伝いをした。その中で、いい図面を書いても、実際に作り上げていく中で、職人・技術が無ければ意味がないと感じた。尊敬する建築家の安藤忠雄氏も職人の重要性について説いている。地方の小さな工務店だからこそ、余計に感じられる。職人の高齢化や後継者不



足は建築に限ったことではないが、やはり自分で実感することでき付かされた。技術を持った職人たちとともに、将来建築をしたいと思った。

施工の場面では、やり直しができない場面が多々ある。そのような状況の中で、図面を具現化していくためには、確かな技術を持った職人が必要である。また、具現

化する中で、ただ建てるのではなく、いい建築にするために情熱をもって作業してもらおう。その情熱を持ったためには、設計士が設計への思いを伝えることが重要だと思う。良い設計をして、良い職人に仕上げてもらおう。この関係性があってこそだと、この夏に気付かされた。

建築士になる上で、現在心掛けていることがある。それは、建築に囚われ過ぎないことである。文系大学を卒業し、一般企業で営業をしていたから感じることもなのかもしれない。建築士のスタートラインに立ったばかりであるからこそ、様々なことを吸収しなければならない。そのためには、学校で机に向かっている時以外も、何かしらの形で建築に時間を割いている。しかし、語弊があるかもしれないが、それでは、普通の建築士になってしまいう気がする。私は大学で建築を学んだ訳でもなく、高校からストレートで専門学校に進んだ訳でもない。大学では、スペイン語を専攻し、食品販売企業で営業していた建築士はあまりいないだろう。私の経歴上、あま

り普通ではないのだからこそ、建築ばかりに執着してはいけない気がする。だからこそ、建築以外のモノにも時間を割いている。趣味に時間を割いているということではないが、様々なクリエイターたちの作品を見てセンスを磨いている。有名なクリエイター達は、自分の分野だけでなく、それ以外の分野でも造詣が深いことが多い。様々な分野を混ぜ合わせることで人に感銘を与えるものを作り出しているように思うからこそ、建築以外のモノになるべく触れるように心がけているのである。

建築で重要になる施主の思いを汲み取る部分では、営業マンとして働いていた要素を活かしていきたいと考えている。営業として、活動する上では、顧客の求めていることを、自分の持つ商品を組み合わせることで応えていくことが重要だった。建築士としては、施主の求めるモノを具現化するために、施主の思いをできる限り汲み取り、自分の持つ力で作り出していくことだと考えている。また、建築においては、施主とその建築を利用する人が一致しないことが建築物が大きくなればなるほどある。営業の仕事でも顧客とその先にいる消費者は一致しなかった点と似ている。そういった部分に自分をうまく活かしていきたいと思っている。

私が建築士として活動する際に心掛けていきたいことには、自分のこれまでの経験が活かされていくだろう。それを考え直す経験と時間がこの夏にできて良かった。

専修学校の部 佳作

働くことの喜び

東京エアトラベル・ホテル専門学校 二年

高橋 瑛 乃

私はアルバイトの経験の中で、たくさん働くことの喜びを感じます。

私がファミリールレストランのアルバイトを始めたきっかけは、最初は好きなものを自由に買いたい、お金が欲しい、という、とてもシンプルなものでした。それまでは、両親からお小遣いをもらって生活していたので、欲しいものがあっても我慢したり、何か月もかけてお金を貯めて買ったりしていました。しかし、高校に入学してアルバイトができるようになってからは、より多くのお金を使えるようになり、趣味に投資できるようになったことで生活がより充実しています。また、アルバイトをした分だけ、頑張った分だけ、お金という見える形に変わります。それは、また次も頑張ろうというモチベーションにもつながり、働くことの喜びの一つでもあります。

私は、アルバイトを始めてから自分は大きく変わったと思います。それまではマイペースで、自分の好きなことを優先するような性格でした。しかし、アルバイトを通して、チームワークの大切さを理解し、周りの状況をみて行動する柔軟

性が身に付きました。ファミリールレストランのアルバイトは、チームワークがとても重要です。チームで動くので、その輪を乱せば良いサービスはできないし、こちらも気持ちよく働くことができなくなります。そこで大切なのは、コミュニケーションです。コミュニケーションをきちんととれば、作業が速やかになったり、アルバイト仲間との距離も近くなったりします。

私が高校時代に現在のアルバイトを始めた当初は、周りには大学生、主婦が多く、それまであまり接してこなかった年齢の人と話す機会がたくさんありました。五年経った現在は、新人指導をする立場になりました。いろんな状況の中で、相手の年齢や自分の立場にに応じてのコミュニケーションの取り方が身に付きました。また、アルバイトを通して、単に仕事仲間というだけではなく、プライベートでも遊ぶ大切な友人を得ました。一緒に働いていない現在でも連絡を取りあい、親しくしています。

また、アルバイトを始めたばかりで、まだできる仕事も少なかった時、なにをするべきかわからずその場にただ立っていることがありました。するとお客様アンケートに、「気の遣えない女の子」と書かれてしまいました。私にとってはそれがとてもショックでした。それからは、客席をまわり、食べ終わっているお客様のお皿をさげたり、お水のお替りをしたり、積極的に行動するようになりました。まだできることは少なくても、お客様と接する機会も増え、「ありがとう」と言われることが多くなり、そうするとうれしくて、アルバイトを楽しんでいるようになりました。周りをみて行動す

ることは、アルバイト以外でも、日々の生活の中に生かすことができます。このように、コミュニケーション能力があり、交友関係が豊かになったり、行動力があがったりと自分の成長を感じられることも働くことの喜びの一つです。

しかし、私はお金をもらうこと、友人ができることだけでは、一つのアルバイトを五年間も続けることはできなかったと思います。ではなぜ続けることができていたのか。それは、やりがいを感じられるからです。

五年間働いてきて、怒られることもたくさんありました。理不尽なクレームも少なくありません。そういった中でも、やりがいを見つけたとはできます。私にとってそれは、自分の成長を感じることと、お客様から頂く「ありがとう」という言葉です。以前、モーニングに来る常連さんから、「高橋さんの笑顔は素敵だから気持ちがいい気分になれるよ。いつもありがとうね。」と言われたことがありました。自分の接客でお客様にそのような言葉をもらえて、本当に嬉しかったです。それが原動力となって、またさらに頑張ろうと思えました。

将来、社会に出ると責任の重さはさらに重くなり、また自分のためだけでなく、家族のために働くことになります。今よりもさらに辛いこともあるかもしれませんが、その中でも働くことの喜びを見つけて頑張りたいと思います。

私の将来の「夢」

マリールイズ美容専門学校 一年

小松 美樹

私の将来の夢は美容師になることです。この夢は幼稚園生の時から変わっていません。

私には二つ下の妹がいます。私が髪を結んであげると、とても嬉しそうにしてくれ、もっと色々なアレンジを出来るようになりたいとその時強く思うようになりました。自分の将来の「夢」として美容師を目指す決めました。

高校に入学し、私の夢である「美容師」になるということがより明確に、そして身近になっていきました。ただ漠然と美容師になりたいと思っていた私には、どこの美容専門学校を進路校として決めるのが合っているか、学校卒業後の就職についても真剣に考える事が多くなりました。初めは戸惑ってしまいましたが美容師の離職率が高いことを資料等から知り、本当に私に続けられるのか不安にもなりました。

しかし、そんな時改めて自分は美容師になりたいと思う出来事がありました。

私は高校三年間ダンス部に所属し、大会の時には衣装に合わせて、メイクやヘアアレンジをします。その時、メイクの色合い、どんなヘアアレンジをするのか、私中心で考えてほしいと先輩に言われた時、責任感と得意とする美容を任され

たことで胸が高まりました。ダンスと衣装のイメージにぴったりなものを考えようと張り切りました。メンバー一人ひとり、顔つきや髪の長さ、毛質が違うので、メンバー全員に合う、そしてダンスのイメージに合っているヘアメイクを考える時、思ったより難しく悩みました。しかし、私にとって好きな事でありやりがいを感じ、他の高校に負けないものを作ろうと一生懸命取り組みました。その結果先輩方には、あなたがいないと素敵な「髪型」や「メイク」が出来なかったと言われ、とても嬉しく感動でした。どんなに大変であっても、私が将来就きたい職業は「美容師」だと改めて強く思うようになりました。

私は「夢」を叶えるべく、美容専門学校に入学しました。専門学校は高校とは違い、全ての授業が自分の将来の夢である美容師に必要な知識や技術なので、先生の言葉ひとつひとつが勉強になり、様々な事に挑戦することで新たに自分に技術が身に付いてきて、学校がとても楽しくなりました。

しかし、授業内容によっては楽しいことばかりではなく、学びの中で得意、不得意な科目がはっきりしてきました。不得意な科目はやる気が起きないこともありました。さらには、私の考えが浅はかなせいで先生に怒られてしまったこともありました。先生が私の将来を見据えて本気で指導して下さるのに、不得意だからやららない自分に腹を立てると同時に、先生に対して失礼だと気付かされました。専門学校で学ぶ事全てが自分の夢の為に必要なことであり、一生懸命、目の前の課題を一つひとつ、着実にクリアしていこうと強く思えるようになりました。

これからの学校生活、自分が分からない事は積極的に先生へ質問し、見て感じた事や気付いたことを自分自身の知識や技術として、生かしていけるようにすると決心しました。

一年後、私が国家試験に合格し、美容師になるという「夢」が叶えられた時、美容師として誰からも求められるような美容の技術者になりたいのはもちろんの事ですが、特に同性から強く求められる美容師になりたいと願っています。女性は髪が命です。その大切な髪を私が切り、セットを任せてもらえる美容師になるまでにはとても長い時間がかかると思います。技術面で悩んだり、大きな壁に当たる事も多々あると思います。私はそこで決して諦めることなく、将来の夢である美容師の実現を応援し、学校にも通わせてくれている両親、美容師になるために人格形成をご指導して下さる先生方に、恩返しができる立派な美容師になりたいと思います。

これからは努力することとを惜しまず、私の将来の「夢」である美容師実現に向かい、前だけを見て、日々の学校生活をより有意義に過すと共に勉学に励みたいと思います。



平成 28 年度 作文コンクール 応募校一覧（応募数・入選数）

（中学校の部）

番号	区・市名	学校名	応募数	入選数
1	中央区	晴海中学校	7	
2	墨田区	寺島中学校	3	
3		両国中学校	2	
4		文花中学校	3	
5		吾嬬立花中学校	3	2
6		本所中学校	7	2
7	大田区	大森第一中学校	2	2
8		大森第六中学校	10	1
9	世田谷区	烏山中学校	10	3
10	中野区	第七中学校	1	
11	北区	稲付中学校	1	
12		滝野川紅葉中学校	2	1
13		明桜中学校	2	1
14	足立区	江南中学校	1	1
15		上沼田中学校	2	
16	葛飾区	常盤中学校	3	
17		堀切中学校	10	
18		奥戸中学校	4	
19		葛美中学校	5	
20	新宿区	西早稲田中学校	1	1
21		牛込第二中学校	5	
22		新宿西戸山中学校	3	
23	目黒区	大鳥中学校	1	
24	品川区	日野学園	2	
25	杉並区	松溪中学校	10	
26	江戸川区	小松川第三中学校	1	
27	府中市	府中第三中学校	1	
28	東村山市	東村山第四中学校	5	3
29	三宅村	三宅中学校	4	
30	東京都	立川国際中等教育学校	3	
31		大泉高校附属中学校	2	1
32	私立	愛国中学校	3	
計			119	18

（高等学校・専修学校の部）

番号	学校名	応募数	入選数
1	東京都立農芸高等学校	11	1
2	東京都立農業高等学校	7	
3	東京都立瑞穂農芸高等学校	5	1
4	東京都立農産高等学校	7	1
5	東京都立園芸高等学校	1	
6	東京都立大島高等学校	5	
7	東京都立田無工業高等学校	1	1
8	東京都立小金井工業高等学校	1	1
9	東京都立杉並工業高等学校	1	
10	東京都立荒川工業高等学校	3	
11	東京都立墨田工業高等学校	1	1
12	東京都立赤羽商業高等学校	4	
13	東京都立忍岡高等学校	10	
14	東京都立大島海洋国際高等学校	4	1
15	東京都立野津田高等学校	4	4
16	東京都立稔が丘高等学校	10	
17	愛国高等学校	9	6
18	村田女子高等学校	1	
19	蒲田女子高等学校	5	
20	日本工業大学駒場高等学校	10	
21	国際理容美容専門学校（高等専修）	9	
小計		109	17
1	青山製図専門学校	10	1
2	中央工学校	2	
3	東京エアトラベル・ホテル専門学校	6	1
4	マリールイズ美容専門学校	1	1
小計		19	3
計		128	20

（まとめ）

区 分	応募校数	応募人数	入選数
中 学 校	32	119	18
高 校 等	21	109	17
専修学校	4	19	3
総 計	57	247	38

平成二十八年年度 作文選考委員名簿 (順不同・敬称略)

中学校の部

高等学校・専修学校の部

委員長	立川市立立川第七中学校	校長	大神田 佳明	委員長	東京都立鷺宮高等学校	校長	石坂 敦子
委員	中央区立日本橋中学校	校長	平松 功治	委員	東京都立農業高等学校	校長	齋藤 義弘
委員	小平市立小平第十五小学校	校長	熊井 久乃	委員	東京都立杉並工業高等学校	校長	高 幹 明
委員	葛飾区立葛美中学校	校長	志村 昌孝	委員	東京都立荒川商業高等学校	校長	長 江 誠
委員	葛飾区立一之台中学校	校長	入山 賢一	委員	東京都立町田総合高等学校	校長	濱田 准一
委員	足立区立江南中学校	校長	宮下 みどり	委員	安部学院高等学校	校長	安部 元彦
委員	新宿区立新宿養護学校	校長	寺島 京子	委員	日本工業大学駒場高等学校	教諭	竹内 真
委員	八王子市立上柚木中学校	校長	坂詰 悦子	委員	学校法人 中央工学校	広報センター長	高橋 隆泰
委員	中野区立第七中学校	副校長	深井 明美	委員	教育庁指導部高等学校教育指導課	課長代理 (課務担当)	
委員	荒川区立赤土小学校	副校長	出井 玲子				坂口 雄一
委員	教育庁指導部義務教育指導課	指導主事	吉川 泰弘	委員	教育庁指導部高等学校教育指導課	指導主事	
委員	教育庁指導部義務教育指導課	指導主事	馬場 一平				宮川 麻衣子

あとがき

平成28年度の作文コンクールは、5月の第1回目の作文選考委員会に始まり、7月の応募作品の募集、9月の第一次選考、10月の第2回目の作文選考委員会における第二次選考を経て受賞作品が決定されました。引き続き選考結果の発表を行い、12月16日に都民ホールにおいて受賞者に対する表彰式を行いました。

その間、応募してくださった多くの学校の生徒さんや先生さんの作品制作に対する努力はもとより、ご指導いただいた先生方、厳正に審査をしていただいた選考委員の諸先生方、また作文コンクールの運営等に、ご尽力いただいた多くの皆様方に心より感謝申し上げます。

今年度の応募作品数は中学校の部で32校119編、高等学校・専修学校の部で25校128編（高等学校21校109編、専修学校4校19編）でした。昨年度の応募作品数が中学校の部で18校82編、高等学校・専修学校の部で20校114編（高等学校15校93編、専修学校5校21編）でしたので、比較すると専修学校を除いて中学校、高等学校においては応募作品数を大きく増加させることができました。これは昨年度応募作品数が大きく減少したことを踏まえて、その対策を選考委員会や事務局において検討し、可能な限りの改善策を実施したことによるものと考えます。

この作文集はそれぞれの作品の原文を出来る限り尊重し、原則として原文どおりに編集しました。しかし、人権

上問題のある表現や明らかな誤字や脱字につきましては作品の文意を損なわない範囲で直させていただきました。

応募された作品は、それぞれの生徒や学生達の日々の学習活動や様々な体験活動中から学び得た事とおして自身の内面や生き方、また将来の夢を模索する作品が多く寄せられました。応募した生徒や学生が作文をとおして、自ら学ぶ意義を考え、将来への展望を見出して行く切っ掛けとなり、そのことにより今後の学校生活がより充実し、将来への進路を考えるための一助となれば幸いです。

最後に、この作文集が会員校のみならず、広く教育機関等で活用されることを期待しております。

明日に生きる 第二十七号

— 作文コンクール入選作品集 —

平成二十九年三月一日 発行

発 行 東京都産業教育振興会

〒二六三八〇一 東京都新宿区西新宿二一八一一
東京都教育庁都立学校教育部高等学校教育課内
電 話 〇三―五三二〇―六七二九
FAX 〇三―五三八八一―七七二七

印 刷 株式会社小葉印刷所